

共同研究・研究プロジェクト

共同研究・研究プロジェクト一覧	研究期間
文学資源研究系	
【共同研究】日本古典籍特定コレクションの目録化の研究	6年
和刻本（五山版・近世初期刊本）の研究	6年
【共同研究】近世後期小説の様式的把握のための基礎研究	6年
学芸書としての中世類題集の研究	6年
文学形成研究系	
古典形成の基盤としての中世資料	6年
本文共有化の研究	3年
平安文学における場面生成研究	6年
近世文芸の表現技法「見立て・やつし」の総合研究	6年
複合領域研究系	
【共同研究】文化情報資源の共有化システムに関する研究	3年
【共同研究】開花期戯作の社会史研究	6年
アーカイブズ研究系	
経営と文化に関するアーカイブズ研究	6年
【共同研究】東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究	6年
アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究	6年

1. 文学資源研究系

【総括】

文学資源研究系は、文学資源である原本資料の調査に基づいた総合研究を行うことを目的とする、共同研究を含む以下の4つのプロジェクトによって構成される。具体的には、書誌データの集積と分析、書籍の形態と内容の考究、目録及び解題の作成などの基礎的研究を中心としながら、さらに文学の成立基盤と生成・変容、享受の問題までを総合的に考究しようとするところに特色がある。また、本研究系のプロジェクトは、原本資料の調査、収集、提供という当館のミッションに基づいた基幹事業に近接して起立しているものが多いため、事業面の動向にも注意を払いつつ、研究面と事業面の業務の切り分けを整理しながら進めなければならない難しさもある。

本年度は中期計画の初年度ということもあり、月例の文学資源研究系会議の中で、順次、4プロジェクトの紹介と進捗状況の報告を行い、意見の交換を通じて、互いの理解を深めることから出発した。また文学資源研究系全体として、研究機関研究員、リサーチアシスタント等の若手研究者の参加を積極的に得ることに努めた。また各プロジェクトは、下記のとおり、関連資料の調査及び収集、書誌データの分析など、研究基盤の整備面を中心に、おおむね着実に立ち上がり、次年度以降の本格的な展開に向けて備えることができた。

共同研究【日本古典籍特定コレクションの目録化の研究】

プロジェクト代表者：鈴木 淳

プロジェクト参加者：大高洋司、落合博志、加藤昌嘉、渡辺浩一、入口敦志、山田直子、相田 満、浅野秀剛（千葉市美術館学芸課長）、神作研一（金城学院大学文学部助教授）、佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫助教授）、佐藤 悟（実践女子大学文学部教授）、松方冬子（東京大学史料編纂所助手）、ロバート・キャンベル（東京大学大学院総合文化研究科助教授）

(1) 概 要

本研究は、原本資料の調査、及び書誌データの分析に基づいた書誌的研究また目録化の研究を行うもので、いわば書物の調査から分析、解題、目録化までの一連の流れを繰り返しながら、深化を図る循環的研究である。具体的には、「日本古典籍分類表」の確立、「田安德川家日本古典籍書誌目録」の作成と出版、ドイツ、プルヴェラー家所蔵の日本絵本の目録化を柱とする。また書誌データの分析、目録化ということでは、当館の図書館事業の古典籍総合目録データベース、及び原本の整理、目録化事業との協同も視野にいたした研究である。

計画は、もっとも多く作業量が見込まれた、「田安德川家日本古典籍書誌目録」の書誌記述の点検が終了したことを考えれば、順調に遂行できたといえる。ただし、反省すべき点として、共同研究として研究者コミュニティの広がりの中での実施という意味では、不十分だった面も否めない。

なお本研究は、科学研究費補助金の基盤研究 A「日本古典籍分類概念表の確立と古典籍総合目録データベースにおける分類化促進」（研究代表鈴木淳）の成果を一部、反映させながら進めている。

各項目ごとの進捗状況は、下記の通りである。

① 古典籍分類表の作成

日本文学及びその周辺の日本古典籍分類表の作成に向けて、3度の研究会を開催した。研究会では、改正素案に基づき、まず文学領域の中、近世の小説、とくに仮名草子、咄本、読本、実録、近世軍書などについて、具体的な作品を挙げながら、その分類を検討した。次年度以降も文学の諸領域について、さらに専門研究者の意見を探り入れながら作業を進める必要がある。

② 田安德川日本古典籍書誌目録の作成

当館寄託の田安德川家資料の書誌情報を分析し、序跋、奥書、識語等の情報も取り込んだ書誌目録を作成するため、同資料における千点余の書誌データの整理、及び原稿記述の点検が済み、そのデジタル化もほぼ終わることができた。また書名・著者名索引の作成などを併行して進めており、平成 17 年度に予定されている出版に向けて比較的順調に作業が進んでいる。

加えて、昭和 22 年作成の徳川家旧蔵御書物目録（イ目録）、及び昭和 13 年の売り立て目録（巖松堂）も付載することを決定し、前者のデータ化を進行中である。これによって、田安德川家の蔵書構成の全体像がほぼ明らかになると考えられる。

③ プルヴェラー蔵日本絵本コレクションの目録化

ドイツ国ケルンのゲルハルト・プルヴェラー氏所蔵日本絵本コレクション（THE ROSEMARY AND GERHARD PULVERER COLLECTION）について、新規 128 点、補訂 175 点の書誌データの整備及び目録化を行った。

(2) 活動記録

① 田安家分類目録編集会議（館内）

日 時 平成 16 年 6 月 29 日（火）16：00～17：30

議 題 目録編集方針について

出席者 鈴木 淳、入口敦志、山田直子、伊藤達氏

② 田安德川家書誌目録編集会議（館内外）

日 時 平成 16 年 11 月 5 日（金）10：30～12：00

議 題 目録編集方針について

出席者 神作研一（金城学院大学助教授）、佐々木孝浩（慶応大学斯道文庫助教授）、松方冬子（東京大学史料編纂所助手）、鈴木 淳、入口敦志、山田直子

③ 古典籍分類表の作成研究会（第 1 回）

日 時 平成 16 年 12 月 27 日（火）14：00～17：20

テーマ 近世散文の分類を中心に

出席者 鈴木 淳、大高洋司、入口敦志、相田 満、渡辺浩一、山田直子、津田真弓

④ 古典籍分類表の作成研究会（第 2 回）

日 時 平成 17 年 2 月 15 日（火）14：00～16：00

テーマ 近世小説の分類について 仮名草子と咄本を中心に

出席者 鈴木 淳、大高洋司、入口敦志、山田直子、津田真弓

⑤ 古典籍分類表の作成研究会（第 3 回）

日 時 平成 17 年 3 月 22 日（火）14：00～

テーマ 近世小説の分類について 軍書と実録を中心に

出席者 井上泰至（防衛大学校助教授）、鈴木 淳、大高洋司、加藤昌嘉、入口敦志、相田 満、渡辺浩一、山田直子、津田真弓、伊藤達氏

⑥ 田安德川家書誌目録の概観

共同研究者 神作研一

日 時 平成 17 年 3 月 9 日（水）～11 日（金）

作 業 田安德川家本のサーヴェイ（概観）

【和刻本の研究】

プロジェクト代表者：山崎 誠

プロジェクト参加者：陳 捷、和田恭幸、堀川貴司（当館客員教授・鶴見大学文学部教授）

(1) 概 要

本研究は、和刻本漢籍の調査・研究および研究のための基本情報の収集を中心とするものであり、とくに日本における漢籍の受容状況の研究、および五山版・近世初期刊本の書誌情報の整備を中心として研究を行うものである。和刻本は、日本文学の形成と展開を考究する上で必要不可欠な重要な資料群であるにも関わらず、従来の日本文学研究においては網羅的な研究がなされてこなかった。それを克服するためには、大学・地域を超えた研究拠点での計画的な研究活動により、研究基盤を整備することが必要である。

本年度は、当初の計画に沿って、和刻本の書誌情報の整備を重点において基本作業を進め、また、当館所蔵の原本資料を最大限に活用するための基本調査を行った。さらに、中国における和刻本の所蔵状況とその伝来ルートについて研究を行い、一定の成果をあげた。

今年度の実施事項としては、具体的に以下のようなものがあげられる。

① 五山版・近世初期刊本の書誌情報の整備

五山版、近世初期刊本の所在情報や、研究書および各資料保存機関の所蔵目録等から本研究に必要な情報を抽出し、さらに、それらに関する研究論文と書影索引などの情報を織り込んだ基本台帳の作成を行った。

② 和刻本の書誌データの整理

当館調査・収集資料により和刻本データの整理を行った。平成8年以後の分はすでに完成し、平成17年度において全て完成する予定である。

③ 和刻本研究文献目録の作成

和刻本研究文献目録の作成のための基本作業である研究文献の調査・収集を行い、文献目録の収録範囲、分類、凡例などについて検討した。

①～③はいずれも和刻本の書誌情報の整備に関する基本作業であり、これらの仕事を通して、今後の研究の基礎は整えられたので、平成17年度からは、既成の書誌解題・先行研究・書影等を索引化し、研究者一般の利益となるべき基礎資料の作成に進むことを予定している。

④ 中国における和刻本の所蔵状況とその伝来ルートに関する研究

中国国家図書館・北京大学図書館所蔵和刻本の調査を行い、中国における和刻本の伝来ルートについても研究を進めた。これらの調査・研究は、日本における漢籍の受容という側面のみではなく、中国における和刻本の受容の状況の解明にも繋がる。また、今後の調査をスムーズに進め、さらに調査先の研究スタッフとの共同研究の可能性を探るため、中国北京での調査期間中に、中国国家図書館古籍善本部と共催で研究会を行った。

(2) 活動記録

① 中国所在和刻本調査の実施

日 時 平成16年9月13日～平成16年9月18日

場 所 中国国家図書館、北京大学図書館

参加者 大高洋司、陳 捷、岡 雅彦、堀川貴司

② 研究会の開催

日 時 平成16年9月15日

場 所 中国国家図書館

参加者 大高洋司、陳 捷、岡 雅彦、堀川貴司、李 際 寧、史 叡、陳 紅 艶、王 茜
ほか30名

テーマ 十七世紀初期の日本の出版状況

【学芸書としての中世類題集の研究—『夫木和歌抄』を中心に—】

プロジェクト代表者：田淵句美子

プロジェクト参加者：小川剛生、中野真麻理、久保木秀夫、小秋元段（当館客員助教授・法政大学文学部助教授）、ローレル・ロッド（当館外国人研究員・コロラド大学日本比較文学部教授）

(1) 概 要

本プロジェクトは、中世最大の私撰集・類題集である『夫木和歌抄』を中心に上げ、それを単なる和歌集成書ではなく、一つの学芸書として捉え、中世から近世までの学芸史の中に置いて、その知の構築と享受の具体相を明らかにし、和歌史・学芸史・文学史の中において、学際的

に定位することを目的とする。また『夫木和歌抄』だけではなく、その比較資料、関連資料も視野に入れて、研究をすすめる。

平成 16 年度は、『夫木和歌抄』及びその周辺の研究史を網羅・総括し、今後検討すべき問題点を鮮明にするとともに、伝本書目を作成・整理し、重要な古写本・古筆切、抄出本、関連資料の調査を行い、研究の基盤を整備し、今後の研究構築への見通しを得た。

本年度の計画は、当初の計画に沿って、来年度以降の研究プロジェクトの基礎的基盤作りを行った点において、一定の成果をあげたと言える。こうした基礎的調査と整理は、ある作品対象を取り上げる際には必要不可欠のものである。が、一方では、ミーティングは数多く行ったものの、研究会は一度しか催すことができなかったことはやや不十分であった点も否めない。中世最大の類題集という非常に大部な資料であるから、調査・翻刻などに時間がかかることも一因としてあげられよう。来年度には数回の共同研究会を予定している。

なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「鎌倉期文献の継受と展開に関する総合的研究」（平成 16 年度～平成 19 年度。研究代表者田淵句美子）の成果を一部、反映させながら進めている。

今年度の成果としては、具体的には以下のようなものがあげられる。

① 『夫木和歌抄』の伝本書目リスト・享受史年表の作成

国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによって『夫木和歌抄』の伝本・抄出本を一覧し、整理する作業を行い、「夫木和歌抄伝本書目一覧」を作成した。また『夫木和歌抄』の享受を伝える資料を集成し、享受史年表を作成した。

② 『夫木和歌抄』の伝本及び抄出本の調査・研究・翻刻

(1)の作業に基づき、重要な伝本の調査・翻刻を開始した。まず『夫木和歌抄』の最古の伝本の一つと目される伝後小松院宸筆本（巻一のみ）の調査を行い、翻刻を開始した。また『夫木和歌抄』の諸伝本の形態とその目的を考えるため、いくつかの抄出本について考察した。まず春夏部の抄出である叡山文庫本の調査を行い、翻刻を開始した。その奥書からは、多くの天台の学僧たちも『夫木抄』を活用していた可能性があることが推測され、『夫木抄』の広範な影響力を解明してゆく手がかりともなる。また春部の抄出本で最古写本の一つである後崇光院筆本（『拾葉集』）を翻刻し、データ化した。

なお文学形成研究系の本文共有化の研究で『夫木和歌抄』全文データベースを作成しているが、本プロジェクトでは生成と享受の動態を探るため、全文翻刻では通常取り上げられない零本や抄出本に注目している。

③ 比較資料の調査・研究

平安末期成立の散佚歌集「懷中抄」について、『夫木抄』などに基づく復元的研究を開始し、また『歌枕名寄』について調査・研究を開始した。また当館で購入するに至った『本草和歌集』を取り上げ、研究を開始した。さらに『夫木和歌抄』の撰歌源となった『新撰六帖題和歌』の注釈作業を進めた。

④ 関連資料の調査・研究

関連資料として『伊勢物語』『新古今和歌集』、同時代資料として『太平記』の版本について、国文学研究資料館蔵マイクロフィルムにより書誌情報を集め、版種の分析作業をすすめた。これらについては近く『調査研究報告』に掲載の予定である。

(2) 活動記録

① 平成 16 年 4 月以降 月に一回程度ミーティング（経過報告と打ち合わせ）

- 同 11 月 4 日 太鼓谷稻成神社（田淵）歌書の調査
- 同 11 月 30 日 叡山文庫（中野）叡山文庫本『夫木和歌抄』の調査
- 同 11 月 16 日 明治大学附属図書館（久保木）『歌枕名寄』残欠本の調査
- 同 12 月 6 日 プロジェクト研究会
 テーマ 本年度のプロジェクトの統括
 出席者 田淵句美子、中野真麻理、小秋元段（客員助教授）、小川剛生、
 久保木秀夫、七田麻美子（当館リサーチアシスタント）
- 同 12 月 8 日～9 日 長崎県立対馬歴史民俗資料館（久保木）
 『歌枕名寄』残欠本の調査
- 同 12 月 14 日～16 日 熊本大学附属図書館（小川）歌書の調査
- 平成 17 年 2 月 18 日 内藤記念くすり博物館大同薬室文庫（久保木）
 『歌枕名寄』残欠本の調査

共同研究【近世後期小説の様式的把握のための基礎研究】

プロジェクト代表者：大高洋司

プロジェクト参加者：入口敦志、飯倉洋一（大阪大学大学院文学研究科教授）、木越俊介（山口県立大学国際文化学部専任講師）、小二田誠二（静岡大学人文学部助教授）、鈴木圭一（神奈川県立川崎高等学校教諭）、高橋圭一（大谷女子大学文学部教授）、田中則雄（島根大学法文学部助教授）、浜田啓介（京都大学名誉教授、花園大学文学部客員教授）、藤澤 毅（尾道大学芸術文化学部助教授）、山本 卓（関西大学文学部教授）

(1) 概 要

本プロジェクトは、近世未整理資料研究の一環として、近世小説全体の中でも最も整理の遅れている後期諸ジャンルのうち、読本・実録・滑稽本・人情本の 4 ジャンルを対象とし、まず、それぞれに対する従来の概念把握・分類基準に再検討を加えることから始めて、ジャンル同士を有機的に関連づけつつ、大きな視点で把握することを試みる。その過程で、読本・実録については八戸市立図書館所蔵本のうち、南部家旧蔵本の図録解題（『八戸市立図書館所蔵読本・実録図録解題』〈仮題〉、平成 19 年刊行予定）を作成し、上記検討作業の中間報告とする。また滑稽本・人情本については、人情本を中心に、現在最も正確な書目年表と、文政期人情本の解題を作成することを目標とするものである。

基礎作業がほぼ順調にはかどったことに加えて、当プロジェクトに対する八戸市立図書館及び市当局の理解と協力をいただくことができ、初年度としては、予想以上の成果が得られたと考えている。

① 読本・実録の書誌的整理

上記図録解題の作成準備として、本年度は館内に蓄積された書誌情報を中心に整備を進め、読本については、解題の直接の対象となる八戸市立図書館所蔵旧南部家本 114 点について入力完了した。また、参考資料として浜田啓介氏から提供を受けた、読本を中心とする近世後期小説の書誌カード 1,030 枚の入力準備作業を終えた。

残存量が膨大で独自の処理が必要な実録は、整理がやや遅れているが、徐々に書誌情報の輪郭が整って来ている。

② 滑稽本・人情本の書誌的整理

年度当初の計画を人情本中心に改めて、滑稽本は参考程度に止め、本年度中に館内における書誌情報の整備を一応終了、館外の伝本との比較調査を行うためのフォーマットを作成した。

③ 共同調査の実施

八戸市立図書館への共同調査を、2回実施した（平成16年7月31日～8月2日、平成17年3月10日～12日）。前者では、調査に加え、八戸市図書館及び市当局に対する本プロジェクトへの理解と協力の要請、後者は、年間活動の報告を兼ねるものである。

④ 共同研究の開催

プロジェクトチーム全体の共同研究会を2回にわたって開催（平成16年8月3日、平成16年12月21日）、いずれも進行状況説明に続いて、「近世後期小説の様式的把握」をめぐる研究発表・討議を行い、高レベルの知見を共有することができた。なお、他に、作業の中間報告を伴う館内研究会を3度催した。

(2) 活動記録

① 第1回館内プロジェクト研究会

平成16年6月21日（火）

「八戸市立図書館南部家旧蔵読本のデータ作成に当たっての問題点」

参加者：大高洋司、入口敦志、津田真弓、大屋多詠子（当館リサーチアシスタント）、菊池庸介（当館アルバイト）

② 第1回八戸市立図書館共同調査

平成16年7月31日（土）～8月2日（月）

参加者：浜田啓介（京都大学名誉教授）、田中則雄（島根大学助教授）、松野陽一、大高洋司、津田真弓、大屋多詠子、菊池庸介

③ 第1回共同研究会 13:30～17:00（当館）

平成16年8月3日（火）

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1. プロジェクトメンバー紹介・内容説明と経過報告 | 大高洋司 |
| 2. 平成14年度共同研究「人情本の所在調査」報告 | 鈴木圭一
(神奈川県立川崎高等学校教諭) |
| 3. 「人情本」関係データ整理報告 | 津田真弓 |
| 4. 研究発表「地本から書物へー文化期中本型読本の展開」 | 木越俊介
(山口県立大専任講師) |

参加者：浜田啓介、飯倉洋一（大阪大学教授）、高橋圭一（大谷女子大学教授）、山本 卓（関西大学教授）、小二田誠二（静岡大学助教授）、田中則雄、木越俊介、鈴木圭一、近藤瑞木（東京都立大学助手）、二又 淳（明治大学非常勤講師）、檜山裕子（青山学院高等学校非常勤講師）、勝又 基（立教大学非常勤講師）、松野陽一、大高洋司、入口敦志、津田真弓、大屋多詠子、菊池庸介、陳 捷（当館助教授）、佐藤藍子（東京大学大学院）、山名順子（お茶の水女子大学大学院）

④ 第2回館内プロジェクト研究会

平成16年9月21日（火）

「実録のデータベース化作業などを通じて考えたこと」

参加者：大高洋司、津田真弓、大屋多詠子、菊池庸介

⑤ 第3回館内プロジェクト研究会

平成16年11月30日（火）

「人情本の書誌的特徴」

参加者：大高洋司、津田真弓、大屋多詠子、菊池庸介

⑥ 第2回共同研究会 13:30～17:00（当館）

平成16年12月21日（火）

1. 読本・実録解題作成についてのお願いと、読本の分類についての提言 大高洋司
2. 実録関係データ整理報告 菊池庸介
3. 研究発表「実録における「構想」意識」 小二田誠二

参加者：浜田啓介、飯倉洋一、小二田誠二、田中則雄、湯浅佳子（東京学芸大学助教）、木越俊介、鈴木圭一、山空 誠（静岡県立藤枝北高等学校教諭）、二又 淳、檜山裕子、志 賢（韓国国立麗水大学校助教授）、大高洋司、入口敦志、津田真弓、大屋多詠子、池 庸介、佐藤藍子、山名順子、渡辺さやか（お茶の水女子大学大学院）

⑦ 第2回八戸市立図書館共同調査

平成17年3月10日（木）～12日（土）

参加者：小二田誠二、二又 淳、大高洋司

2. 文学形成研究系

【総 括】

文学形成研究系では、成立・表現・享受といった観点から日本文学の作品的特質を明らかにすることを目的として、各時代個別の3つの研究プロジェクトと、全時代にわたる1つの研究プロジェクトを推進した。

時代別のプロジェクトは、6年計画の1年目として、それぞれの時代を専攻する内部の教員が中心となって推進、客員教授も参画し、また随時開催した研究会では外部研究者の参加も要請して、研究上の問題やプロジェクトに対する様々な意見を得た。

全時代にわたるプロジェクト（本文共有化の研究プロジェクト）は、3年計画の1年目として、当研究系の全教員が参加し、学界にむけてアンケートを実施することによって、研究者コミュニティの意見を摂取しつつ研究を推進した。

各プロジェクトには、若手研究者が非常勤研究員やリサーチアシスタントといった形で参画、外国人研究員も参加して、研究者の養成と研究の展開において成果があった。

プロジェクトの第一段階でのとりまとめとして、CD-ROMをふくむ3点の刊行物を作成したことが、平成16年度の目に見える形での主たる成果であった。これはプロジェクトの現段階を学界と社会に発信し、その評価を得て研究を進めていくためのものである。

いずれのプロジェクトも研究の1年目として、おおむね順調なすべりだしと言えるが、さらに多様な外部研究者の参加を求めることなどによって、研究者コミュニティとの、より緊密な関係をきづく必要性が課題として認識された。

【平安文学場面生成研究】

プロジェクト代表者：中村康夫

プロジェクト参加者：伊藤鉄也、加藤昌嘉、江戸英雄

(1) 概 要

本プロジェクトは、日本語かな散文の表現機構が生起発達した平安時代の諸作品を主な対象として、場面を構成する諸要素、場面に表れた表現類型について研究した。従来型の「用例」研究では、作品あるいは表現についての研究は、断片化あるいは細分化に向かうほかなかった。「場面」という概念を導入することによって、諸作品や表現史を縦断的あるいは横断的に俯瞰する総合的な観点を獲得し、「場面」に表現される事象、心象についての多角的な分析を行うところに、本研究プロジェクトの特色が存する。

本年度は「場面」に表された「水」に関わる自然界の物象、人為結果としての事物をとりあげ、物語の(1)場面生成の方法と(2)表現類型の歴史的変遷について研究した。(1)については江戸英雄が『うつほ物語』、伊藤鉄也が『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』を対象として、(2)に関しては中村康夫が「血」、加藤昌嘉が「涙」という視点から、それぞれ考察を重ね、随時討議を行うことによって研究を推進した。これらのまとめとして、11月5日に「〈水〉の平安文学史」をテーマとする公開研究発表会を実施した。研究発表会は、チラシによって事前に告知し館外からの自由な参加を募り、留学生を含む約20名の研究者が参加した。研究成果の第一年度の報告書として、年度末に「平安文学場面生成研究プロジェクト論文集1」『〈水〉の平安文学史』を刊行し、関連の研究者、研究機関に約300部配布した。

(2) 活動記録

① 研究会等

a. 研究打ち合せ（研究発表会・報告書のための準備）

平成 16 年 4 月 9 日、5 月 25 日、9 月 1 日、10 月 1 日、12 月 10 日、平成 17 年 1 月 12 日

参加者：中村康夫、伊藤鉄也、加藤昌嘉、江戸英雄

b. 研究発表会：〈水〉の平安文学史

平成 16 年 11 月 5 日（金）

参加者：加藤静子（都留文科大学教授）、河添房江（東京学芸大学教授）、倉田 実（大妻女子大学教授）、佐伯雅子（人間総合科学大学助教授）、野村精一（実践女子大学名誉教授）、横溝 博（日本学術振興会）、頼 国 文（國學院大學院生（留学生））など約 20 名（発表者 4 名を含む）。

② 報告書等

a. 報告書：A5 版 1 段組 162 頁

書 名：平安文学場面生成研究プロジェクト論文集 1『〈水〉の平安文学史』

目 次：緒言

【第一部】場面生成研究

・ 露—「うつほ物語」のあて宮詠「七夕の逢ふ夜の露を…」をめぐって
江戸英雄

・ 雨—歌物語における男と女
伊藤鉄也

【第二部】表現史研究

・ 血—平安文学における表現の位相
中村康夫

・ 涙—「とふにつらさ」
加藤昌嘉

論文別引用資料索引

【古典形成の基盤としての中世資料の研究】

プロジェクト代表者：松村雄二

プロジェクト参加者：落合博志、相田 満、渡辺匡一（当館客員助教授・信州大学助教授）

(1) 概 要

当該プロジェクトは、日本における「古典」の体系と、その形成事情を解明するために、「古典」というものの意味を問い直そうとするものである。そのため日本の古典概念が形成された中世という時期に注目し、人物・書物・概念の三軸に焦点を当てて研究を進める。初年度は「人物のイメージ」に関する研究の基礎資源の分析と整備に重点を置き、また当該テーマに沿った並行的調査研究を 4 回行った。

初回打ち合せにおいて、研究構成員の抱く「古典観」「中世観」に基づいた研究ビジョンを討議し、本年度は、まず基盤的な資料整備を行うという計画のもとに、各々の研究者が当該テーマについての考察を念頭に置きつつ、それについての資料の集積を進めることにした。

それぞれの問題意識の元で進められた「古典」意識の研究については、その後の打ち合せを通じて、日本における「古典意識の祖型としての中世」という一定の方向性を得ることができたが、そのために収集・整備された研究資料の相互評価と総合的な分析は次年度以降に譲ることとなった。

また、本研究で蓄積された資料・情報、さらには問題設定自体についても「中世」という枠組みに収まりきれぬ内容と問題をはらんでおり、今後の課題とした。

理想的には、「中世」という枠組みを相対的・客観的に見つめることが可能となるように、さまざまな分野の人々の参画を得て研究が進められることが望ましく、また資料・データ等の作成に際しては、学際的他分野の研究者にも有益な情報を提供し得ることが大事であろう。

なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（A）「江戸時代初期出版年表の作成」、同基盤研究（B）（2）「和漢古典学のオントロジモデルの構築」、同萌芽研究「和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究」、日台交流協会「平成16年度若手歴史研究者派遣事業」の成果を一部取り入れて推進している。

(2) 活動記録

① 研究会打ち合わせ会

平成16年4月14日、7月7日、9月8日、10月12日

平成17年1月12日・3月16日

② 調査

a. 平成16年5月18日～6月16日

台湾大学・国家図書館台湾分館・故宮博物院文献館（相田 満）

故旧博物院蔵楊守敬旧蔵本『蒙求』のヲコト点・朱点の調査ほか、旧在日本古典籍資料典籍35タイトルの書誌調査を行った。

b. 平成16年7月26日～28日

善通寺聖教調査研究（落合博志・渡辺匡一）

約60点の典籍資料調査を行った。

c. 平成16年8月4日～8日

勸修寺における資料調査（落合博志）

約10点の資料調査を行った。

d. 平成16年8月29日～30日

京都随心院における資料調査（相田 満）

『名目抄』『童観抄』『四書人物考』（10冊）の書誌調査と撮影を行った。

③ 基礎資料の整備

a. 人物年表・画像データベースのデータ整備

61作品中より、3,168人分（延べ4,740人分）の人物画像を取材し、電子化情報として整備・蓄積した。

b. 系図資料の組織化

『新田族譜』『堂上家系譜大成』のデータ整備を進めた。

c. 善通寺聖教目録の整備

目録化に向けて整備を進め調査はほぼ終了し、目録作成のための分類作業を待つ段階となった。

④ 報告書等

a. 「善通寺蔵資料の調査記録」の目録化……………調査カード

b. 人物年表・画像データベースのデータ整備……………データベースデータ、公開データベース

c. 系図資料の組織化……………データシート

d. 台湾大学・国家図書館台湾分館・故宮博物院文献館……………研究報告書(日台交流協会提出分)

【近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究】

プロジェクト代表者：山下則子

プロジェクト参加者：武井協三、加藤定彦（当館客員教授・立教大学教授）、ボナベンチャー・ルベルティ（当館外国人研究員・ヴェネツィア大学教授）

(1) 概要

日本文学作品形成の基盤となる表現技法を明らかにするため、近世文芸に特徴的に現れる表現技法「見立て」「やつし」を研究した。この研究テーマは、従来、俳諧研究、絵画研究、演劇研究といった個別分野で扱われてきた。これに総合的な視野を導入したのが、本研究プロジェクトの特色である。

研究資料として「見立て浮世絵」「絵俳書」「見立て番付」等を調査購入し、それぞれについて個別研究を進めた上で、随時打ち合わせ会をもち、「見立て」をテーマとする公開の研究会を3回開催した。

研究会では絵画・俳諧・演劇研究に実績を有する発表者が、「見立て」「やつし」という技法を、それぞれの方向から照射して研究発表し、学際的討議を行った。とくに「見立て」という表現技法が、時代や分野によってその概念が微妙に変化することが確認され、その定義を確立するためには、個別事象の研究とその比較検討が重要な課題であることが共通の認識となったことは、今後この表現技法を解明していくための、特筆すべき成果であった。

研究会のメンバーは、当館教授2名、客員教授・外国人研究員各1名。外部からのオブザーバー2名も随時研究会に参加し、その他にも2～3名の参加者があった。

研究会成果の中間報告として『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』1号を年度末に刊行し、国内・国外の研究者や公共機関に配布した。

また、これらと並行して、平成18年度初頭に実施予定の公開シンポジウム・展示会についての計画策定を開始した。

なお、この研究プロジェクトは科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「浮世絵画像データベースによる文学的・演劇的解釈の研究―見立の手法の歴史的展開の解明―」の成果を取り入れつつ推進している。

(2) 活動記録

① 研究会

平成16年7月23日（金）「近世後期役者絵の見立て」（発表者：山下則子）

参加者：加藤定彦、新藤 茂（国際浮世絵学会常任理事・兼編集委員長）、武井協三、
武藤純子（学習院大学非常勤講師）

平成16年9月22日（水）「見立てとヤツシー日本人の美意識から俳諧におよぶ―」

（発表者：加藤定彦）

参加者：新藤 茂、武井協三、山下則子、中島次郎（当館リサーチアシスタント・総合研究
大学院大学学生）、小林ふみ子（法政大学専任講師）、千野浩一（東京大学大学院学生）

平成17年1月19日（水）「人形浄瑠璃の見立て番付の紹介」（発表者：武井協三）

「近世後期見立て役者絵の解釈（続）」（発表者：山下則子）

参加者：加藤定彦、新藤 茂・ボナベンチャー・ルベルティ、中島次郎

② 展示会準備連絡会議

平成16年8月6日 於国文学研究資料館

参加者：武井協三、山下則子、ロバート・キャンベル（東京大学大学院総合文化研究科助教）

授)

平成 16 年 11 月 13 日 於東京大学教養学部

参加者：武井協三、山下則子、ロバート・キャンベル

③ 報告書等

・報告書：A4 版 2 段組 58 頁

書 名：『近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究プロジェクト報告書』1 号

目 次：プロジェクト概要

《ヤツシ》から見た庭園文化—作庭・花道・盆石を論じつつ「見立て」に及ぶ—

加藤定彦

国文学研究資料館蔵人形浄瑠璃見立て番付の紹介

武井協三

近世後期見立役者絵の解釈（一）

高橋(山下)則子

収支報告

【本文共有化の研究】

プロジェクト代表者：武井協三

プロジェクト参加者：松村雄二、中村康夫、山下則子、伊藤鉄也、落合博志、加藤昌嘉、相田 満、
江戸英雄

(1) 概 要

この研究は、日本文学の本文を共有するための方法を探り、さらに研究者コミュニティにとって有益な学術研究基盤である日本文学の本文を提供するための、メディアの研究である。

当該プロジェクトは、アンケートの実施などによって、広く研究者のコンテンポラリーな要請を汲み取り、取り扱おうとする作品の研究の実情をも十分に調査し、共有するにあたって最も有効な本文とは何か、それを提供するための最適なメディアは何かについて研究を進めている。本文やその研究状況によって、必要とされる本文の形は一定しないと思われるので、方法は固定せず、柔軟に対応することを基本方針としている。

この研究の成果物として電子化を含む多様な本文の共有化を図り、サンプル的なものを作成して具体的に試験的に学界に提供し、その評価を得た上で、将来にかけて国文学研究資料館が取り組むべき研究と本文提供の姿を探求する。

平成 16 年度は、近世初期に水戸光圀によって編まれ、文化人たちに大きな影響を与えた一大叢書『扶桑拾葉集』（版本 35 冊）の本文提供に取り組んだ。この『扶桑拾葉集』は、今日書籍を入手して親しく閲読することが困難であるため、まずこれを冊子体に作り、同時にフルテキストデータベースとして CD-ROM によって利用できるように仕上げた。今後、これの評価を得て、方針が正しいものであったかどうかを検証していく。

また、『夫木和歌抄』のフルテキストデータベース化を進め、同時に、未だ学界に知られていない注釈書本文をも提供すべく、前準備を進めた。

本研究のように、研究本位の立場に立ち純粋に研究に有効な本文の提供を策定することは、今後の日本文学研究の展開を大きく左右するものであり、情報処理機器が広く行き渡った今日にあっては、電子化テキストについての調査・研究は緊急の重要課題でもある。これら本文の策定と電子化という二つの作業によって、この課題を解決するための一過程を築きえた。

(2) 活動記録

① 説明会

- ・平成 16 年 7 月 8 日 『夫木和歌集』データベース館内説明会（参加者 10 名）
- ・平成 16 年 10 月 14 日 第 1 回『扶桑拾葉集』データベース館内説明会（参加者 5 名）
- ・平成 16 年 11 月 17 日 第 2 回『扶桑拾葉集』データベース館内説明会（参加者 9 名）

② アンケート実施記録

平成 16 年 9 月 25 日	演劇研究会	大阪市立大学
平成 16 年 10 月 9 日～10 日	中古文学会	広島大学
平成 16 年 10 月 16 日～17 日	中世文学会	関西学院大学
平成 16 年 11 月 20 日～21 日	近世文学会	同志社大学

（回収総数 88）

③ 報告書等

- ・報告書：A5 版 2 段組 502 頁
- 書 名：『扶桑拾葉集—本文共有化の研究プロジェクト報告書—』
- 目 次：緒言
- 凡例
- 『扶桑拾葉集』本文
- 系図
- CD-ROM の使い方
- 附 録：CD-ROM 1 枚（冒頭に『扶桑拾葉集』解題あり）

3. 複合領域研究系

【総括】

複合領域研究系においては、学際的な研究領域の開拓を目指して文学作品群の多角的な研究を行うプロジェクトと、文化資源情報の電子化及び共有化に関する研究を行うプロジェクトを、それぞれ共同研究として実施している。前者は、6年計画の1年目として、これまでほぼ手付かずだった研究の基礎部分を固めることを主眼として、調査収集事業部の文献資料調査・収集事業と連動した諸活動を行ったのに対し、後者は、総合研究大学院大学及び旧研究情報部で行ってきた情報資源の共有化とコラボレーションに関する研究と連携しながらそれらを総合的に発展させることを目的として3年計画の1年目の諸活動を行った。いずれのプロジェクトとも、研究は順調に実施されており、前者は次年度以降の研究の多角的展開を、後者は同じく人間文化研究機構の資源共有化プロジェクトと連動した成果の創出を、それぞれ計画している。

共同研究【開化期戯作の社会史研究プロジェクト】

プロジェクト代表者：谷川恵一

プロジェクト参加者：山下則子、青田寿美、北村啓子、木戸雄一、佐々木 亨（当館客員教授・徳島文理大学文学部教授）、青木稔弥（神戸松蔭女子学院大学文学部教授）、加藤禎行（山口県立大学国際文化学部講師）、甘露純規（中京大学文学部講師）、佐藤至子（椋山女学園大学人間関係学部助教授）、佐藤 悟（実践女子大学文学部教授）須田千里（京都大学総合人間学部助教授）、高木 元（千葉大学文学部教授）、高橋昌彦（純真女子短期大学教授）、土屋礼子（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）、中丸宣明（山梨大学教育人間科学部助教授）、山田俊治（横浜市立大学国際文化学部教授）、山本和明（相愛大学人文学部助教授）、山本 良（埼玉大学教育学部助教授）、ロバート・キャンベル（東京大学大学院総合文化研究科助教授）

(1) 概要

開化期戯作を代表する書き手であった仮名垣魯文を対象に、開化期戯作の動態についての総合的研究を行う。

現時点で所在が確認できる仮名垣魯文のすべての著作について、デジタル技術を活用した書誌的調査を行い、その正確な目録と解題を作成する。これにより、今後の魯文及び幕末明治期戯作研究のよって立つ確実な基礎を確立する。

上記の基礎研究と並行して、その成果を活用した、仮名垣魯文の著述活動に関する多面的な解析を、日本文学研究はもとより、演劇史・出版史・ジャーナリズム史などを始めとした幕末明治初期を対象とした文化史研究の成果を取り込みつつ行い、変革期に展開された魯文の著述活動の全体像とその意義を解明する。

① 平成16年度の進捗状況

館内メンバー7名（うち客員教授1名、リサーチアシスタント1名）、館外メンバー14名の共同研究として、以下の事項を実施した。

初年度は、開化期戯作を中心に担った仮名垣魯文の著作について、所在情報を含む著作リストの整理作成と全国の図書館・文庫の調査を行い、199点の著作を調査し、61点を原本で、59

点をデジタルまたは複写により収集した。また、これと並行して、館内メンバーを中心とした月例研究会を7回、研究メンバー全員による研究会を2回開催し、著作解題作成に向けた基礎事項の調整と、個々の著作に関する研究討議を行った。これらにより、本研究プロジェクトを本格的に展開していくための準備を終えることができた。

(2) 活動記録

① 基礎データの整備

a. 仮名垣魯文著作リストの作成

国書総目録・明治期刊行図書目録の情報を整理し、これに公共図書館・大学図書館・文庫などの蔵書検索の結果と、当館が蓄積している調査カード（古典及び近代）及び収集した原本のデータを加え、書誌及び所在情報を含む網羅的な著作リスト（総計 233 タイトル）を作成した。これに並行して、参考書目（魯文校閲・序跋書目、魯文作の引札、魯文の草稿・書簡類等）のリスト化に着手した。

b. 明治初期新聞雑誌記事の調査

魯文を中心とした戯作者の動向を具体的に再構成するための基礎調査（仮名読新聞・東京絵入新聞・歌舞伎新報などからの記事のピックアップ）に着手した。

② 資料の調査と収集

a. 資料の調査

調査収集事業部における特定領域の文献資料調査として、調査員を兼任する研究メンバーと館員が合同で四つの図書館・文庫に所蔵されている魯文の著作の調査と東京都立中央図書館の予備調査を行った。詳細は以下のとおり。

ア) 横浜市立中央図書館（『西洋道中膝栗毛』版本二種、『高橋阿伝夜叉譚』ボール表紙本など 50 点）

イ) 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター・明治新聞雑誌文庫（『西南鎮静録』『松飾徳若譚』など 45 点）

ウ) 毎日新聞社・新谷文庫（魯文自筆稿本『春色柳桜筋』など 6 点）

エ) 三康図書館（『骨稽ひざくり毛』など 16 点）

また、これと並行して、通常の調査により魯文の著作 82 点を調査した。

b. 資料の収集

ア) 原本収集

『英名八犬士』『佐世身八開伝』『都名所図譜』『小夜中山夜啼碑』など、当館未収集の魯文著作を中心に、研究を進める上で不可欠な文献、計 61 点を購入した。これらについては、逐次、書誌データを作成し、研究メンバーのみ閲覧できる web サイトで閲覧し、情報を共有できるようにしている。

イ) デジタル収集

調査収集事業部における特定領域の文献資料収集として、『横浜往来』、『西洋道中膝栗毛』（横浜中央図書館）、『春色柳桜筋』（毎日新聞社・新谷文庫）、『安達原黒塚物語』（個人蔵）など、魯文の著作計 53 点（2,377 コマ）を収集した。これらについては、当館の近代文献データベースから公開すべく準備に当たっている。

ウ) マイクロフィルム・紙焼き収集

マイクロフィルムは、魯文が主筆として刊行した『魯文珍報』（ナダ書房）、及び魯文が関係した『いろは新聞』『今日新聞』、魯文を含む戯作の動向に関わりの深い『東京絵入

新聞』『改進黨新聞』を収集した。また、国立国会図書館から『こがねのはなねこのめかずら』など魯文の著作6点を紙焼きで収集した。

c. 研究会の開催

ア) 月例研究会

客員教員を含む館内メンバーを中心に、魯文の著作の書誌的な研究発表を中心とした月例研究会を6月～3月に7回開催した。

イ) 研究会

9月と1月に、すべての研究メンバーが集る研究会をそれぞれ2日間、3日間の日程で行った。プロジェクト始動の初年度として、魯文の全著作解題作成は研究発表を主体としつつ、書誌解題のための指針の討議を併せ行った。これらを通して、凡例（和装本・和装活版本・洋装本の三種）の骨組みを策定し、メンバー各自が分担した著作解題の執筆に当たっている。

d. ホームページの作成

本プロジェクトの活動記録を公開するホームページを作成中である。公開内容はプロジェクトの概要、活動記録、活動予定等である。また、研究メンバー間の情報交換に利用できる専用ページも併せて開設し、研究会発表資料、作成中の各解題、魯文文献書誌データベース、魯文文献所在先データベースを開設する。

共同研究【文化情報資源の共有化システムに関する研究】

プロジェクト代表者：安永尚志

プロジェクト参加者：原 正一郎、野本忠司、相田 満、五島敏芳、ボナベンチャー・ルペルティ（当館外国人研究員・ヴェネツィア大学東洋学科教授）、安達文夫（国立歴史民俗博物館教授）、伊井春樹（人間文化研究機構理事）、宇陀則彦（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科助教授）、神門典子（国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授）、久保正敏（国立民族学博物館教授）、柴山 守（京都大学東南アジア研究所教授）、松村 敦（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科助手）、山本泰則（国立民族学博物館助教授）

(1) 概 要

① 研究目標

国内外の研究機関等が蓄積・提供する多様な文化科学研究資源データベースを、一元的に横断検索し、関連する情報を網羅し、提供するシステムの実証的開発研究。インターネットを活用し、情報構造や情報検索方式は国際標準方式に準拠した人文科学向けのインターフェースの創出を目指す。

② 平成16年度の進捗状況

館内メンバー9名（うち客員助教授、非常勤研究員、外国人研究員、学術研究支援員、各1名）、館外メンバー7名から成る共同研究として、以下の事項を実施した。国文学研究資料館を含む複数の研究機関の資源共有化の方策を検討し、各種データベースの横断利用システム環境を構築した。これと並行して海外の研究者ディレクトリ・研究論文目録データベース等を整備し、日本文学のコンテンツ形成を進めた。これらの研究は、合せて13回の研究会を積み重ねる中でほぼ計画通りに推進され、着実な研究成果（基盤的な情報資源の収集体制の確立とその一層の進展、海外共同研究拠点の形成とその一層の進展、コラボレーションシステム環境の

一層の推進) が得られた。

(2) 活動記録

① 資源共有化の研究

コラボレーションの整備では、まず研究基盤の準備として、国文学研究資料館における各種の形態の異なる情報資源の資源共有技術の確立を行い、これを基に同種の研究機関の資源共有化の方策を検討し、成果を得た。例えば、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、東京大学史料編纂所、大阪市立大学との情報資源共有化の進展である。基盤技術として、メタデータと標準情報検索プロトコルによる各種データベースの横断利用システム環境の構築である。

具体的には、総合研究大学院大学共同研究プロジェクト「資源共有化」と密接な連携を強化し、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館とのデータベースの横断利用実証実験を推進した。さらに、東京大学史料編纂所、京都大学東南アジア研究所とのデータベース横断利用の接続実験も成功し、試験的に現在研究者に公開し、評価を進めている。この研究成果は、2 日間にわたる公開の合同研究集会として開催し、研究発表、講演を通じて評価を得るとともに、大きな関心を集め、好評を得た。延べ 150 名の参加を得た。

② 国際コラボレーション研究

基盤的情報資源の整備では、海外の研究拠点における研究者ディレクトリ、研究論文目録データベース、翻訳作品目録データベースなどを中心とする情報資源の蓄積がさらに進んだ。これにより、ホームページの充実が促進され、収集してきたコンテンツの情報発信環境を一層整えた。

研究に際しては具体的な研究計画を各国と共同して進めることに留意した。

今年度の国際コラボレーションとして、フランス、イタリア、台湾、韓国、インドなどとの具体的な研究が進んだ。このうち、特に、イタリア、フランスとの枠組が整った。イタリアを中心に、ヴェネツィア大学の Valerio Alberizzi 氏の研究協力により、昨年度までのデータベースにさらに研究者ディレクトリ、研究論文目録、翻訳作品目録を追加、改訂し、データベースが完成した。また、引き続きフランスより College de France から Nathalie Cazal 研究員を招聘し、フランスにおける研究者ディレクトリ、研究論文目録、翻訳作品目録のデータ作成を完了した。ホームページから公開を開始した。さらに、韓国、台湾、インド関連のデータ収集が進み、ホームページに蓄積を進めている。続いて、アメリカ、中国などとの研究調整に進んでいる。

③ コンテンツ整備

今年度も日本文学コンテンツ形成も重点的に進めた。例えば、奈良絵本データベースの充実に向け、全文テキストの翻刻を行い、画像ページデータとの直接対比が可能なデータベースを構築し、ホームページから運用を開始した。10 作品の画像データベースと翻刻全文データベースがリンクしている。また、源氏物語を中心とする定評のある古筆切 14 点、連歌関係古筆切 17 点などを購入し、画像データベース化すると同時に、注釈、翻刻などのアノテーションを行う国際コラボレーション環境の構築を開始した。

さらに、日本古典文学本文データベースでは、引き続き作品の XML 化を推進し、DTD、XML、SGML、KOKIN ルール、プレーンの各データ、並びに原本ページ画像データとの対比が可能な総合データベースを構築している。

④ 海外研究拠点の整備

海外研究拠点の整備では、海外の多くの学協会との協力関係が進展したことが大きい。

とりわけ、AISTUGIA : Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi (伊日研究学会) の協力は極めて大きく、会長の Adriana Boscaro 教授 (Venezia 大学) を始め多くの日本文学研究者の全面的な支援を得、ほぼ完了に近いコンテンツの蓄積が始まっている。また、SFEJ : Societe Francaise des Etudes Japonises (仏日研究学会) も、会長の Cecile Sakai 教授 (Paris7 大学) 始め、College de France などの多くの研究機関から具体的支援を得、コンテンツ収集が進み、研究論文目録、翻訳作品目録データベースの構築と提供を開始している。

その他、台湾、インドの日本学研究者との交流も進み、また下記に述べる国際研究集会への招聘により、研究交流を深めた。

⑤ 研究活動

今年度の研究活動は、個々の専門別研究班などによる随時の研究打合せ、及び随時のメーリングリストによる研究推進を行った。全体の研究会は定例的に2ヶ月に1度開催した。

また、関連する様々な国内外の研究会やシンポジウムに積極的に参加し、研究発表並びに報告を行い、評価を行った。

特に、今年度は本プロジェクトを中心に、総合研究大学院大学共同研究プロジェクト「文化科学研究分野における情報資源共有化のためのコラボレーション研究」と研究連携を強める活動を活発に行った。年度末には合同で公開の研究集会を開催した。

a. 研究会

研究会は定例的に2ヶ月に1度開催し、合計4回開催した。これらの研究会のほかに、随時のミーティングを開き、研究連絡、推進、調整に当たっている。また、科学研究費基盤研究(S)の研究会も合計5回開催した。総合研究大学院大学共同研究プロジェクトの研究会も合計4回開催した。トータル13回の研究会を開催している。ただし、これらは可能なかぎり、合同で開催している。特に、基盤研究(S)及び総合研究大学院大学共同研究プロジェクトとのコラボレーション研究を強化した。さらに、日々の研究推進に当たってはメーリングリスト、ホームページにより、緊密な研究連絡、調整を行っている。

4. アーカイブズ研究系

【総 括】

進展の著しい国際的な動向を踏まえて、我が国のアーカイブズ学の体系化を目指して、次の3つの研究プロジェクトを立ち上げて研究を推進している。収蔵史料を素材としてアーカイブズの特質とその保存・活用方法、及び収蔵史料を情報化するための技法・理論を確立し、さらに諸外国のアーカイブズとの比較検討を進めて、いずれも計画通り進捗している。

- ① 経営と文化に関するアーカイブズ研究（6年計画の1年目）
- ② 東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究（6年計画の1年目）
- ③ アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究（6年計画の1年目）

なお、『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第1号を刊行し、研究成果を発表した。また、『アーカイブズ・ニュースレター』を2号発行し、研究プロジェクトの計画・成果などを速報として公表した。

大学等と連携して研究を進め、歴史学、情報学、美術史などを専攻する大学教員等の調査・研究活動への参加を得ている。また、研究機関研究員・リサーチアシスタント等若手研究者を調査に同行し、シンポジウムで報告させるなど、その育成を積極的に図っている。

【経営と文化に関するアーカイブズ研究プロジェクト】

プロジェクト代表者：丑木幸男

プロジェクト参加者：高橋 実、青木 睦、山崎 圭、神谷 智（名古屋大学文学部助手）、田島達也（京都市立芸術大学美術部講師）、伊達仁美（京都造形芸術大学芸術学部助教授）、藤實久美子（学習院大学史料館助手）、山本英二（信州大学人文学部助教授）、横山憲長（長野県短期大学教養学科教授）

(1) 概 要

所蔵史料のうち「経営と文化」に関する史料として、地主・財閥旧蔵史料を対象に、その特質の解明を図る。所蔵史料とともに各地・機関に保存・所蔵されている関連史料の調査および共同研究会を実施しており、計画の初年度として基礎資料・共通認識を得て、研究の基盤を整えた。

① 地主家資料群の調査・研究

- a. 所蔵史料の須田家文書に関連する常陸国行方郡玉造村・大場家文書を中心とする調査・研究及び交流・公開

ア) 調査・研究

現地で大場家文書の共同調査・研究を2回行った。

茨城県立歴史館・長野県立歴史館で関係する文書の調査研究を行った。

大場家文書目録のデータベースを構築した。

イ) 公 開

共同公開研究会経営と文化に関するアーカイブズ研究プロジェクト報告会を2回開催した。

- ウ) 所蔵史料の山田家文書および現地に保存されている信濃国高井郡東江部村・山田家文書を中心とする調査・研究をし、その成果を共同公開研究会で発表した。また、同文書に含まれる台湾から伝来した清朝末期の「洪紙文書」の補修と研究をした。

- b. 日本実業史博物館資料の調査・研究及び交流・公開

所蔵史料の日本実業史博物館資料の調査・研究をし、その成果を共同公開研究会で発表した。

平成 16 年 9 月 9 日から 10 月 2 日にアメリカ・ミズーリ大学で同大学および渋沢史料館が「日米実業史競」の展覧会を共催し、国文学研究資料館が後援した。所蔵資料「日本実業史博物館」準備室旧蔵資料 85 点を出品して、日米実業の近代化過程における実業史博物館コレクションの位置づけを検討した。

(2) 活動記録

① 調査

a. 大場家文書関係

ア) 日 時 平成 16 年 6 月 18 日、6 月 19 日

参加者 1 名

場 所 茨城県立歴史館・大場正二家

イ) 日 時 平成 16 年 9 月 4 日、5 日

参加者 10 名

場 所 大場正二家（茨城県行方郡玉造町甲）

ウ) 日 時 平成 17 年 3 月 7 日、8 日

参加者 4 名

場 所 大場正二家（茨城県行方郡玉造町甲）

b. 山田家文書関係

日 時 平成 17 年 2 月 18 日、19 日

参加者 1 名

場 所 長野県立歴史館

c. 「日本実業史博物館」関係資料調査

日 時 平成 17 年 3 月 10 日、11 日

参加者 1 名

場 所 国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園）

② 研究会

a. 「日本実業史博物館」関係資料に関する研究会

日 時 平成 16 年 6 月 29 日

場 所 国文学研究資料館

参加人数 13 名（内大学教員 5 名）

研究報告と討論

「日本実業史博物館」関係資料収集の経緯と調査研究の現状・課題

青木 陸

渋沢史料館における日本実業史博物館関連資料の所蔵状況について

井上 潤（渋沢史料館）

日本実業史博物館準備室アーカイブズ（日誌類）の内容紹介

小松賢司

b. 研究プロジェクト合同研究会

「経営と文化に関するアーカイブズ研究会(1) 商品生産・流通と記録・資料管理」

日 時 平成 17 年 2 月 1 日、2 日

場 所 国文学研究資料館

参加人数 23 名（内大学教員 8 名）

研究報告と討論

天保弘化年間・中野村直助商い金滞り出入訴訟の展開と特質 商い帳簿認識と訴訟工作
高橋 実

日本実業史博物館準備室アーカイブズの内容紹介

小松賢司（当館リサーチアシスタント）

日本実業史博物館資料の年次的収集過程

青木 睦・小松賢司

信州和紙の生産流通と御用紙（記録紙）

降幡浩樹（長野市博物館）

日本実業史博物館資料の米国展覧会報告

山田哲好

山田家所蔵渋紙文書の剥離・修復・復元の報告

青木 睦

c. 研究プロジェクト合同研究会

「経営と文化に関するアーカイブズ研究会(2) 地域社会と地主・中間層」

日 時 平成 17 年 2 月 21 日、22 日

場 所 国文学研究資料館

参加人数 16 名（内大学教員 7 名）

研究報告と討論

水戸藩中間支配機構の歴史的展開

籠橋俊光（東北歴史博物館）

信濃山田家文書中の箱館奉行所関係書簡について

谷本晃久（北海道教育大学）

大場家文書の紙質調査について

青木 睦・山崎 圭

常陸国土浦東崎町における安政検地―その顛末と意義

木塚久仁子（土浦市立博物館）

近世村落の成立と入会地紛争

栗原 亮（霞ヶ浦高校）

③ データベース作成など

a. 長野県中野市江部・山田家文書データベースの作成

中野市教育委員会との共同編集

b. 茨城県行方郡玉造町甲・大場家文書データベースの作成

茨城県立歴史館と共同で作成（6,000 点余）

④ 紀要、アーカイブズ・ニュースレターの発行

紀要には次の 6 論文を掲載した。平成 17 年 3 月発行。B5 判、142 頁

喪われた記録戦時下の公文書廃棄

加藤聖文

原爆とアーカイブズ

数野文明（広島県立文書館）

第二次世界大戦における在外公館文書をめぐる日英の確執（後編）

安藤正人

アーカイブズ保存のための物理的コントロールに関する現状

青木 睦（アーカイブズ研究系）、西村慎太郎（学習院大学）

政党史料の収集・保存について 新自由クラブ関係文書を事例として

山本真生子（国会図書館）

日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち「広告の部」資料について

原島陽一（文化女子大学）

『アーカイブズ・ニュースレター』 第 1 号 平成 16 年 9 月発行 A4 判、12 頁

アーカイブズ研究系の発足

丑木幸男

ソウル見聞記

林 雄介

日本文学国際共同研究プロジェクト

安永尚志（複合領域研究系）

情報資源化とネットワーク	大友一雄
比較史料学の可能性	渡辺浩一
『アーカイブズ・ニューズレター』 第2号 平成17年3月発行 A4判、12頁	
大学アーカイブズをめぐる視点	永田英明（東北大学）
日韓近現代歴史資料の共用化への模索	檜山幸夫（中京大学）
国際研究会「近世東アジアにおける組織と文書」	青木 陸
『信濃国御馬寄村町田家文書目録』について	原島陽一（文化女子大学）

共同研究【東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究プロジェクト】

プロジェクト代表者：安藤正人

プロジェクト参加者：渡辺浩一、加藤聖文、林 雄介（当館客員助教授・明星大学日本文化学部助教授）、浅井 紀（東海大学文学部教授）、猪俣（倉沢）愛子（慶應義塾大学経済学部教授）、井村哲郎（新潟大学人文学部教授）、臼井佐知子（東京外国語大学外国語学部教授）、岡崎 敦（九州大学大学院人文科学研究院助教授）、蔵持重裕（立教大学文学部教授）、小風秀雅（お茶の水女子大学文教育学部教授）須川英徳（横浜国立大学教育人間科学部助教授）、高橋一樹（国立歴史民俗博物館歴史研究部助手）、林佳世子（東京外国語大学外国語学部助教授）、三浦 徹（お茶の水女子大学文教育学部教授）、吉田 裕（一橋大学大学院社会学研究科教授）、吉見義明（中央大学商学部教授）、田美姫（韓国・国史編纂委員会）、文叔子（韓国・国史編纂委員会）、王振忠（復旦大学歴史地理研究所教授）、バネッサ・ハーディング（ロンドン大学バーベック校歴史古典考古学科リーダー）、エルキン・ジャン（アンカラ大学言語・歴史・地理学部準助教授）

(1) 概 要

本研究プロジェクトは、東アジアを中心としたアーカイブズの存在状況を広く調査するとともに、それらを比較史料学的な観点から研究し、アーカイブズ資源としての共用化を図ることを目的としている。初年度の平成16年度は韓国に焦点をあて、韓国国家記録院所蔵の朝鮮総督府文書などを調査して研究の基礎資料を収集するとともに、日本・韓国・中国等の近世文書を中心とした比較史料学研究を実施した。また国際シンポジウムを2回開催し、韓国をはじめとする海外の研究者との研究交流基盤形成につとめた。

① 研究・調査

韓国における史料調査を2回実施し、韓国国家記録院や国史編纂委員会において史料を収集した。国内においては、京都大学、山口県文書館、山口大学、山口県立大学、陸上自衛隊 山口駐屯地尚武館、秋田県立公文書館などで史料調査を実施した。

② 公開・交流

ほぼ月1回、館内においてプロジェクト研究会を実施し、国内研究者との交流を行った。

国際的な研究交流としては、まず日韓文化交流基金の助成を受けて公開シンポジウム「日韓近現代歴史資料の共用化に向けて—アーカイブズ学からの接近—」を開催し、韓国から4人の研究者を招いて研究討議を行った。ここでは、朝鮮総督府文書を中心とした植民地期史料の研究と整備を日韓両国の共同作業にもとづいて推し進め、相互に開かれたアーカイブズ・システムを構築する必要性が話し合われた。シンポジウムの成果は、『2004年度東アジアを中心と

したアーカイブズ資源研究プロジェクト報告書：日韓近現代歴史資料の共用化に向けて－アーカイブズ学からの接近』として刊行された。なお、科学研究費補助金基盤研究(A)「旧日本植民地・占領地におけるアーカイブズ政策と記録伝存過程の研究」(研究代表者：アーカイブズ研究系教授安藤正人)の成果を、一部本プロジェクトに反映させた。

次に、東アジアを中心とした比較史料学の研究については、科学研究費補助金基盤研究(A)「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」(研究代表者：アーカイブズ研究系 渡辺浩一助教授)の成果を一部本研究プロジェクトに反映させ、国際研究会「近世東アジアにおける組織と文書」をソウルで開催した。本国際研究会は、東アジアを中心としイスラーム世界と西欧世界も含みこんで中近世の比較史料学研究を行うという計画の第一歩であり、その成果は『2004年度東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究プロジェクト成果報告書：近世東アジアにおける組織と文書』として刊行された。

(2) 活動記録

① 研究会

平成16年5月19日：第1回研究会(「朝鮮総督府文書をめぐる課題」加藤聖文)

6月23日：第2回研究会(「学習院大学東洋文化研究所所蔵史料について」

辻 弘範)

7月14日：第3回研究会(「朝鮮総督府関係史料の国内所在状況中間報告」

竹内 桂)

8月19日：第4回研究会(「前提的知識の共有と方法論の模索」

渡辺浩一

「朝鮮時代の統治機構と各種文書」

須川英徳)

平成17年1月5日：第5回研究会(「宝巻史料について」

浅井 紀)

② 国内調査

平成16年9月9日(調査者5人)

中央日韓協会にて朝鮮総督府関係者(3名)からのオーラルヒストリーを行う。

平成17年1月6日～8日(調査者4人)

京都大学工学部図書室・山口県文書館・山口県立大学図書館・陸上自衛隊山口駐屯地尚武館等にて朝鮮総督府関係者の史料調査および収集を行う。

平成17年3月3日～5日(調査者5人)

新庄市ふるさと歴史館・秋田市赤れんが郷土館・秋田県公文書館にて朝鮮総督府関係者および秋田県庁文書(李公行啓関係)の史料調査および収集を行う。

③ シンポジウム

a. 「国際研究会近世東アジアにおける組織と文書」

期 間 平成16年11月22日～23日

協力・会場 韓国：国史編纂委員会

主 催 アーカイブズ研究系

助 成 科学研究費補助金基盤A2「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」(研究代表者・渡辺浩一)

構 成

第1部 中央政府における記録の作成と保存

王室での記録の生産と保存－朝鮮王朝実録、儀軌、実録形止案を中心として－
シン・ビョンジュ(ソウル大学奎章閣)

江戸幕府と記録管理

大友一雄

第2部 地方行政機構における文書処理と保存

朝鮮時代地方官衙における記録の生産と保存

キム・ヒョニョン（韓国国史編纂委員会）

日本近世における幕府領の支配と史料

山崎 圭

第3部 家と村落、行政と共同体

近世における両班家門の文書伝来と構造

ムン・スクジャ（韓国国史編纂委員会）

朝鮮後期における村落文書の生産と管理

イ・ヘジュン（公州大学）

日本近世村落における文書の作成・管理・保存について

高橋 実

徽州村落文書の形成—二種類の写本『新安上溪源程氏郷局記』を中心として—

王 振 忠（復旦大学中国歴史地理研究所）

第4部 商人・同業組織と行政

朝鮮時代の商人文書について

須川英徳（横浜国立大学教育人間科学部）

（コメント）日本近世の商業史料について

渡辺浩一

参加者 54人

b. 日韓国際シンポジウム「日韓近現代歴史資料の共用化へ向けて—アーカイブズ学からの接近—」

期 間 平成16年12月11日～12日

会 場 学習院大学

構 成

基調報告

歴史資料共用化の前提

金 翼 漢（韓国明知大学校）

歴史資料の共用化とアーカイブズ学の課題

安藤正人

朝鮮総督府関連史料の構造分析

国家記録院所蔵朝鮮総督府文書をめぐる現状と課題

李 炅 龍（韓国国家記録院学術研究士）

韓国における歴史資料所蔵機関の現状と課題 日本側研究者から見た視点

林 雄介（明星大学）

朝鮮総督府文書と個人史料のアーカイブズ学的考察

加藤聖文

戦後における朝鮮総督府関連史料の収集—「友邦文庫」の場合—

辻 弘範（学習院大学東洋文化研究所）

朝鮮総督府関連史料の情報管理

東アジア植民地記録の特性と記録館

李 承 輝（韓国記録管理学教育院）

韓国所蔵植民地期史料の所在データベース化事業について

許 英 蘭（韓国国史編纂委員会）

日本所蔵朝鮮総督府関連史料の概要—検索システム構築へ向けて—

竹内 桂

参加者 150人

④ 研究成果

- a. 『東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究プロジェクト報告集 日韓近現代歴史資料の共用化に向けて—アーカイブズ学からの接近』の目次は次の通りである。

平成 17 年 3 月発行、B5 判、185 頁

歴史資料共用化の前提	金 翼 漢
歴史資料の共用化とアーカイブズ学の課題	安藤正人
朝鮮総督府文書管理の現況と課題	李 炅 龍
韓国における歴史資料所蔵機関の現状と課題—日本側研究者から見た視点—	林 雄介
朝鮮総督府文書と個人史料のアーカイブズ学的考察	加藤聖文
戦後における朝鮮総督府関連史料の収集—「友邦文庫」の場合—	辻 弘範
東アジア植民地記録の特性と記録管理	李 昇 輝
韓国所蔵植民地期資料の所在データベース化事業について	許 英 蘭
日本所蔵朝鮮総督府関連史料の概要—検索システム構築へ向けて—	竹内 桂

- b. 『2004 年度東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究プロジェクト成果報告書

近世東アジアにおける組織と文書』の目次は次の通りである。

平成 17 年 3 月発行、A4 判、335 頁

研究の目的・方法

研究活動の記録

(1) 国内研究会

第 1 回

前提的知識の共有と方法論の模索	渡辺浩一
朝鮮時代の統治機構と各種文書	須川英徳

第 2 回

宝巻史料について	浅井 紀
----------	------

(2) 国際研究会「近世東アジアにおける組織と文書」

第 1 部 中央政府における記録の作成と保存

王室での記録の生産と保存	申 炳 周
江戸幕府と記録管理	大友一雄

第 2 部 地方行政機構における文書処理と保存

朝鮮時代地方官衙における記録の生産と保存	金 炫 榮
幕領の支配と史料	山崎 圭

第 3 部 家と村落、行政と共同体

近世における両班家門の文書伝来と構造	文 叔 子
朝鮮後期における村落文書の生産と管理	李 海 濬
日本近世村落における文書の作成・管理・保存について	高橋 実
徽州村落文書の形成	王 振 忠

第 4 部 商人・同業組織と行政

朝鮮時代の商人文書について	須川英徳
日本近世の商業史料について	渡辺浩一

討論記録 英文報告要旨 批評 史料調査記録

【アーカイブズ情報の資源化とネットワーク研究プロジェクト】

プロジェクト代表者：大友一雄

プロジェクト参加者：山田哲好、五島敏芳、村越一哲（当館客員助教授・駿河台大学文化情報学部助教授）

(1) 概要

アーカイブズ情報の資源化及びその情報の提供環境とは如何にあるべきか、国際的な動向を踏まえながらそのあり方を実験的な取り組みを通じて提案することが、本研究プロジェクトの目的である。平成16年度は以下の三つをサブテーマとして大学等の諸機関の協力を得て実施し、初年度として研究の基礎資料を得るとともに、研究基盤を整備した。

① 記録史料群の構造化に関する研究

a. 調査・研究

近世・近代の組織体活動と文書・記録の関係を、組織体構造の分析を通じて追究し、個々の文書・記録を組織体構造のなかに位置づける基礎的な研究を実施した。具体的には収蔵史料のうち地主経営文書を中心とする(1) 信濃国高井郡東江部村山田家文書、(2) 尾張国海西郡鮎浦村木下家文書と、近世の村役人制に関係する(3) 出羽国村山郡山家村山口家文書の三文書群を対象として分析を進め、(1)(2)についてはアーカイブズ研究系研究会において、その成果を発表した。また、関連して近世の文字社会と情報システムに関する研究を実施した。

b. 公開

(1)～(3)は、その成果を踏まえて、市販応用ソフトウェアのデータベース管理システムを用いてデータベースを試作した。また(1)(2)については、同システムを用いて史料目録を刊行した。インターネット上での公開も別途準備中である。(3)については次年度公開のために準備作業を進めた。

② EAD規格による情報の組織化のための研究

a. 調査・研究

収蔵史料の情報を広く共有し利活用できるよう、その資源化・組織化・公開に関する研究を進めた。とくに日本の史料目録（検索手段）を、電子的検索手段のデファクト国際規格EAD（Encoded Archival Description）とXMLによって電子化する方法を研究した。具体的には、(1) 既刊『史料館所蔵史料目録』23冊（B5判3,224頁分）についての試験データ作成・修正、(2) このデータをもとにしたEAD/XML化のためのツール開発および加工実践、(3) EAD/XMLデータのweb表現のためのスタイルシートおよび諸プログラムの研究開発、(4) EAD/XMLデータ構築のための支援データベース・システムの研究開発およびモニタ試験、(5) 昨年度刊行分の『史料館所蔵史料目録』のデータベース化およびEAD/XML化の実践、のそれぞれを実施した。

b. 交流

国立国語研究所のXMLによる資料記述蓄積・公開支援システムや、東京大学経済学部図書館文書室のXMLおよびダブリン・コアによる検索システムについて調査を実施した。

c. 公開

公開研究会「日本のアーカイブズの電子的検索手段のために：身近な道具とXMLによるデファクト国際規格EAD検索手段の実現」を開催した。EADにもとづく電子的検索手段のWeb上での表現や、そのためのデータの構築手順、そういったデータ構築の日本のアーカイブズにそくした具体的記載形式・仕様、等について議論された。

③ 情報提供とネットワークシステムに関する研究

a. 調査・研究

日本における文書群の伝来と公開機関の設置運動に関する研究に関わり、記録史料保存利用機関情報とそこで公開されている記録史料群情報を、今年度は中国・四国・九州地区を対象に調査・収集した。また、これら集約した情報を共有化するためのシステム開発し、「史料情報共有化データベース」に実装した。なお、これらの研究では科学研究費補助金基盤研究 (B)「アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究」の成果を踏まえた。

b. 公 開

調査収集情報はシステム開発の成果を活用して、平成 17 年度に Web 上で公開する準備を進めた。

(2) 活動記録

① 調査・研究

a. 記録史料群の構造化に関する研究

①信濃国高井郡東江部村山田家文書、②尾張国海西郡鮎浦村木下家文書、③出羽国村山郡山家村山口家文書の 3 文書群の組織構造を解明した。研究成果を踏まえデータベース化を試作した。

ア) 研究会

平成 17 年 1 月 20 日 (アーカイブズ研究系研究会)

山崎 圭「信濃国高井郡東江部村山田家文書の編成について」

大友一雄「尾張国海西郡鮎浦村木下家文書群の階層構造」

② EAD 規格による情報の組織化のための研究

EAD 化のための支援プログラムの開発

a. EAD/XML データ構築用 VBA プログラム一式

b. 表示用スタイルシートおよび PHP スクリプト等, データ変換 (アイテム-レベルデータ抽出) 用スタイルシートおよび JAVA (SAX) プログラム (呼出用 MS-DOS バッチファイル)、EAD/XML ファイル管理用索引作成スタイルシートおよび Microsoft Excel ブック (出力結果 XML ファイル, 呼出用 HTML ファイルとも)、概要データベース索引データ抽出用スタイルシートおよび JAVA (SAX) プログラム (呼出用 MS-DOS バッチファイル)、各一式、

③ EAD/XML 化支援史料目録データベース-ファイル (Microsoft (c) Access 97 版) を開発した。

また、次のとおり公開研究会で関連のプログラムを発表した。

a. 公開研究会「日本のアーカイブズの電子的検索手段のために身近な道具と XML によるデファクト国際規格 EAD 検索手段の実現」

開催日 平成 17 年 1 月 24 日

会 場 国文学研究資料館

参加者 32 名

研究報告

1. XLT・PHP による EAD / XML データの変換と表示

丸島和洋

2. VBA を利用した史料目録 EAD 化のためのツール開発

1. 共同研究・研究プロジェクト

村越一哲

3. 元号を含む日付の西暦変換：Microsoft Excel のアドイン関数の開発

岩熊史朗（駿河台大学文化情報学部）

4. 日本における EAD 検索手段のデータ記載形式：EAD 実践ガイドラインをもとにして

五島敏芳・戸森麻衣子

5. パネルディスカッション 進行：大友一雄

パネラー：報告者 藤吉圭二（高野山大学文学部）

5. 総合研究大学院大学プロジェクト

(1) 研究組織

研究代表者：安 永 尚 志 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
研究分担者：鈴木 淳 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
谷川 恵一 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
武井 協三 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
中村 康夫 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
大友 一雄 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
山下 則子 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 教授
伊藤 鉄也 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 助教授
原 正一郎 国文学研究資料館, 助教授
相田 満 国文学研究資料館, 助手
佐藤 信子 国文学研究資料館, 学術研究支援員
大内 英範 日本文学研究専攻, 国文学研究資料館 学生
及川 昭文 総合研究大学院大学 教授
久保 正敏 地域文化学専攻, 国立民族学博物館 教授
山本 泰則 地域文化学専攻, 国立民族学博物館 助教授
合庭 惇 国際日本研究専攻, 国際日本文化研究センター 教授
早川 聞多 国際日本研究専攻, 国際日本文化研究センター 教授
山田 奨治 国際日本研究専攻, 国際日本文化研究センター 助教授
安達 淳 日本歴史研究専攻, 国立歴史民俗博物館 教授
小島 道裕 日本歴史研究専攻, 国立歴史民俗博物館 助教授
鈴木 卓治 国立歴史民俗博物館 助手
高橋 一樹 国立歴史民俗博物館 助手
山本 毅雄 情報学専攻, 国立情報学研究所 教授
大山 敬三 情報学専攻, 国立情報学研究所 教授
北本 朝展 国立情報学研究所 助手
佐藤 園子 国立情報学研究所 研究支援推進員
石上 英一 東京大学史料編纂所 教授
横山 伊徳 東京大学史料編纂所 教授
林 譲 東京大学史料編纂所 教授
柴山 守 京都大学東南アジア研究所 教授
宇陀 則彦 筑波大学大学院筑波大学図書館情報学系 助教授
松村 敦 筑波大学大学院筑波大学図書館情報学系 助手

(2) 研究経緯

総合研究大学院大学を共通の場とする人文科学領域の情報資源の共有化を目指す研究プロジェクト「文化科学研究分野における情報資源共有化のためのコラボレーション研究」を実施した。本年度は、第2年次の研究プロジェクトで最終年度である。

総研大学内6専攻（文化科学研究科の日本文学研究専攻、日本歴史研究専攻、国際日本研究専攻）

攻、比較文化学専攻、地域文化学専攻及び数物科学研究科の情報学専攻)、学外4大学等(東京大学史料編纂所、大阪市立大学学術情報総合センター、京都大学東南アジア研究センター、筑波大学)並びに業者3社((株)日立製作所、(株)インフォコム、日本電気(株))によって組織した。これらに所属する30名の研究分担者、研究協力者、及び学生によって、実証実験を通じて、実用化の目的を達成し、高い評価を得た。

システム技術は、人文系情報資源への初めての適用となるメタデータ(Dublin Core)に基づく共通情報検索プロトコル(Z39.50)の実現性を実証した。一方、コンテンツ研究では奈良絵本、古事類苑のデータ形成と一部の公開を行った。ホームページにより、研究成果を公開している(<http://world.nijl.ac.jp/~kiban-s/>)。

今年度では共同研究会を行い、さらに当館において公開の研究集会を2日間に渡って開催し、150余名の参加を得て極めて好評であった。

この研究プロジェクトでは、当専攻内における教育研究だけではなく、総合研究大学院大学の全学事業に対する協力を推進した。

(3) 研究成果

- ① 第1回資源共有化に関する研究集会報告書、平成17年1月
- ② 第2回資源共有化に関する研究集会報告書、平成17年3月
- ③ 山本泰則、原正一郎、柴山 守、安達文夫、合庭 惇、安永尚志：Dublin Core メタデータとZ39.50プロトコルにもとづく人文学系データベースの統合検索に関する実証実験、人文科学とコンピュータシンポジウム、pp.199-205、平成16年12月

2

情報事業センター

1. 調査収集事業部

【総 括】

国文学研究資料館は、国内外の研究者・研究機関との緊密な連携の下に、日本文学及びその関連資料の計画的な調査・収集を継続してきたが、平成16年度の法人化に当たって、本事業部がその担当部署となった。調査・収集業務が創設以来の根幹事業であることに変わりはなく、本年度においても国内外において遂行され、調査・収集点数共に、年度当初の目標を達成した。

本年度の調査・収集業務の中には、「特定領域調査・収集」が含まれている。これは、複合領域研究系プロジェクト「開化期戯作の社会史研究」と連動する形で、幕末・明治期の戯作者仮名垣魯文関係の資料を集中的に調査・収集して共同研究に供するものであり、研究と一体となった新たな調査収集事業のモデルケースとして、館内外の研究者により、本年度から開始されたものである。

本事業部では、旧文献資料部以来、調査の記録である調査カードのデータ（書誌情報と画像）を広く一般・学界に公開するため、「日本古典資料調査データベース」の構築を続行している。平成16年度はその4年目に当たるが、順調に公開点数を増やしている。

刊行物についても、懸案であった「表紙文様集成」を『調査研究報告』の別冊として刊行するに至った。

その他、30年間の蓄積を踏まえ、今後の調査収集計画に関する総体的な検討を行い、いくつかの点について、基準・制度を改正した。

また、本事業部において、当館名誉教授福田秀一氏から寄贈された外国出版による日本文学の研究書・翻訳書のコレクションである、福田文庫約1,000点の網羅的な調査を行い、解題を順次刊行しているが、本年度はその一部をなす『海外における平安文学』を刊行した。

本事業部には、さらに、アーカイブズ情報資源化に向け、旧史料館に所属していた教員をチーム員としたアーカイブズ調査収集が加わった。日本の近世・近代史料について、①全国の史料群所在情報の調査、②史料の存在形態調査、③所蔵史料に関連する史料の調査・収集を行うものであり、本年度については『史料目録』2点を刊行している。

【国内外の所蔵機関に存在する日本文学及びそれに関連する資料の調査・収集】

(1) 日本文学関連資料の調査・収集

平成16年度においては、図書館・寺社・文庫等の所蔵機関国内166カ所、海外6カ所において、古典及び近代（明治大正）の日本文学及びそれに関連する原典資料の調査を行い、約1万点について、各々調査カードを記録した。またこれらのデータに基づき、国内60カ所の所蔵機関における資料約4,000点を撮影（マイクロ、デジタル）により収集した。本年度の成果を加え、日本文学研究の基盤は総体としてさらに整備・強化され、研究の質の向上に大きく裨益するものとなった。

(2) 日本古典資料調査データベース

本事業部にこれまで蓄積された調査カードは約 21 万 5,000 枚、レコード件数 27 万件であり、平成 16 年度においてはそのうちの約 9 万件を公開するに至った。なお本データベースへの本年度アクセスは、月平均 455 件（頁枚数は約 1,350 枚）であり、研究者間に定着、安定して利用されている。

(3) 調査収集の成果としての刊行物

『調査研究報告』第 25 号、及び別冊「表紙文様集成」を刊行した。前者は国内外の調査・収集活動報告を収載した年間報告書として、事業と研究との接点をなすもの、後者は、多年にわたる調査員の要望に応える成果である。

(4) 調査収集に関する総体的な検討及び改善のための取り組み

「調査研究シンポジウム」の開催準備、和刻本漢籍の調査・収集についての基準策定、国書の収集のうちコマ数の多い資料の扱いについての基準策定などを行った。また、調査員の枠組みを変更する（実施は平成 17 年度以降）など、制度上の改善のための取り組みを行った。

【外国語による日本文学の翻訳書・研究書の調査】

福田文庫の外国語による日本文学研究文献のうち、本年度は平安文学関係 145 点の調査・解題作成を行い、『海外における平安文学』を刊行した。

【アーカイブス調査・収集】

(1) 史料群所在情報の調査

全国の史料群情報を調査し、目録類 226 冊を収集した。

(2) 史料の存在形態調査及び関連史料の調査と収集

『史料目録』第 79 集（尾張国海西郡鰐浦村木下家文書、収録数 3,200 点）、『史料目録』第 80 集（信濃国高井郡東江部村山田家文書（その 2）、収録数 4,015 点）を刊行した。

また当初の年度計画（5,000 点）以上の点数について、史料整理・目録・電子化を実施し、公開のための基盤整備を行った。

(3) 所蔵史料に関連する史料の調査及び収集

『史料目録』及び『史料叢書』に関連して、愛知県域・岡山県域・京都府域の調査を実施した。「文部省調査局宗務課引継文書」のうち「神社明細帳」に関連して、島根県・高知県分を調査し、マイクロフィルム・複製本を収集した。また、武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書他 3 史料群のマイクロフィルムの複製を行い、現物史料 1 件を購入した。この結果、公開収蔵史料の質的充実を図ることができた。

2. 電子情報事業部

【総 括】

電子情報事業部は、情報システムの有効・適切な運用をはかり、研究及び事業の成果を電子情報として組織化し、データベース化を進め、研究者、大学院生、社会一般に、インターネットにより提供している。さらに、国内外の関連研究機関等との連携を進め、情報資源共有化事業を進めている。

情報システム環境は、第六期情報システム（平成13年～平成17年）の第4年次にあたり、1年を通じて24時間不断の稼働を保持し、情報システムと情報資源の安定的な管理運用を行い、高い信頼を得ている。政府調達に則り、第七期情報システム（平成18年～平成22年）への移行準備を滞りなく進めた。平成17年3月現在意見招請の段階にあり、次年度導入の環境を整えた。

法人化以前に構築してきたデータベースと関連システムの保存、保守、更新など管理運用にあたり、現在14本のデータベースの公開を滞りなく行っている。各データベースには、個々に責任者と担当者を置き、高信頼度のサービスを維持している。一方、新たなデータベース（4種）の構築を進め、次年度から公開の体制を整えた。

共同利用者の便宜の向上と高信頼度の情報提供のために、データベースサービス窓口体制を整え、さらにより高度なレファレンス業務を行う体制を整えた。試行を進め、次年度早期からの実用化を目指している。データベース利用に関わる評価のための利用統計等のデータ収集と分析を行い、データベース利用環境の向上に努めた。

複合領域研究系が進める資源共有化プロジェクトと連携し、現在独立しているデータベースの一元化の共有化を事業として検討、準備した。実験環境の整備、情報資源のメタデータ作成、国際標準情報検索システムと導入と調整、実証実験と評価を行った。総合研究大学院大学を場とする教育研究における資源共有化は、多くの研究機関との接続を成功させ実用化の準備を整えた。

電子情報事業部における事業の総合評価をまとめる。年度計画に準じた全事業は滞りなく進捗し、目標を達成し、利用者からも高い評価を得た。次年度以降に向けての新たな情報システム環境の整備とデータベースを中心とする情報資源の機能拡充、共有化整備を進め、発展性に寄与した。情報資源のホームページからの公開は、利用者、アクセス数等の増大、並びに各種意見や要望への対応により、高い社会性と公開性を達成している。一方、情報資源の説明会や講演会、出版物等を通じて、社会へのアウトリーチに評価を得た。

【電子情報事業部の運営】

(1) 組織体制と運営

部長（安永尚志教授）を置き、副部長（原正一郎助教授）他、3チーム（情報システム、データベース、データベースサービス）により組織された。各チームにはチームリーダーを置き、21名の教員を分担配置し、チーム事業の実行責任を担った。各チームは事業課長の指揮の下、システム管理係、学術情報係が実務処理を担当した。

予算執行並びに運営の効率化を図った事業推進のため、情報システムチームとデータベースサービスチームを統合化した運営を行った。作業の効率化と共に、窓口業務等の運営に情報システムをうまく取組む効果が得られ、事業目標の見通しが明確化した。

毎月1回の割で、定期的に部会を行い、全事業の進捗度をチェックし、計画の実施状況の把握と評価に務めた。また、開発すべきシステムの仕様等の策定、分析を行った。より専門的な事項

について、専門作業部会（情報システム入替えに関する諸委員会や作業委員会、データベースサービス窓口に関する諸作業委員会等）を設け、審議し、立案し、案を部会で確認し、決定、推進した。

(2) 情報システムの運用管理

現在の第6期情報システムの安定的運用管理に努めた。管理運用体制として、情報システムチーム及びデータベースサービスチームが当たり、実務、事務処理は事業課システム管理係並びに学術情報係が担った。なお、システムの日常的な監視、操作、記録等の実務作業は、副部長、システム管理係の指示により、外注SEに分担させた。

情報システムは、ハードウェア、ソフトウェア並びにネットワークから構成される。これらの年間を通じて24時間不断の安定稼働を実施している。情報システムに関する実績評価分析は、システム稼働状況（CPU稼働率、ディスク使用率、ネットワーク・トラフィック）による。また、情報システムに蓄積された日本文学とそれに関わるアーカイブズ研究資料情報等の資源監視、プロセス監視、ユーザ管理、バックアップの定期的な運用管理を行っている。とりわけ、情報システムで稼働しているデータベースの安定的稼働に努め、館内外の研究者等に重要なデータベースの提供サービスを実施することができた。

なお、次年度施行される個人情報保護法に関する諸準備、対策を行った。

(3) ネットワークシステムの運用管理

研究、教育、業務におけるネットワークシステムについて、障害に強く、かつ安定的な稼働に努め、また電子メール等へのウイルス進入に対する予防対策、緊急対応、システムの更新、パッチ等を可能な限り速やかに行い、対処し、高信頼性の運用を保持した。

基盤設備の館内LANは、基幹系回線と支線系回線から構成している。これらがファイアウォールを経由して、外部ネットワーク(SINET)に接続されている。現状の回線容量は5Mbpsと遅く、すでに業務の円滑な運営に支障を来し始めている。そのため、新年度に向けて100Mbpsへの回線容量の増大を企画し、準備を行い、推進した。

(4) 情報資源の運用管理

公開されている14個のデータベースの年間を通じて切れ目のない24時間安定的な稼働を行い、館内外の利用者の評価を得た。データベースによっては、データの追加拡充を進め、また誤り等の更新を速やかに行っている。なお、これら情報資源の定期的なバックアップを行い、不測の事態に対しても十分な対応を行い、高信頼度の運用を行った。

また、年度内にフルテキスト型のデータベース3件、目録型データベース1件の追加登録を行い、新年度よりの公開に備えた。

さらに、近代文学資料の画像データベースの公開に伴う所蔵者からの公開制度面に関する要請に応え、データベースの出力制限機能（コンテンツ出力保護対策）の実装を行い、実証実験を行った。

(5) 情報サービスの向上

法人化以前のデータベースシステムの利用実態は単純な利用状況に限定されており、利用者の利用実態分析は進んでいなかった。また、ポリシー上不可欠な予測は行っていない。したがって、サービス評価用システムと運用の整備を可及的速やかに整える必要があり、対策を検討し、システム環境を整備し、必要なシステム開発を行った。

さらに、データベース利用統計は、Web環境のサーバシステム（Apacheシステム）でのWebページのアクセス記録等の分析を進めた。

【個別事業の実績、評価】

(1) 情報システムの運用管理

情報セキュリティの高さを維持し、情報システムと情報資源の安定的管理運用を行うため、以下のように業務を行った。

① 情報システムの運営

システムのオペレーション、バージョンアップ、パッチ作業等は、情報システムチームリーダーの指揮の下、事業課システム管理係により実施した。監視と操作作業は外注 SE により行い、係において分析評価した。今年度においては、情報システムのハードウェア、ソフトウェア、オペレーションに起因する重大なシステム障害、およびネットワーク障害、さらに外部からの干渉（ハッキング等）による重大なシステム障害は発生していない。

また、ネットワーク障害は発生せず、情報セキュリティの高さを維持し、情報システムと情報資源の安定的管理運用を行うことができた。端末系、プリンタ系の障害等については、事業課システム管理係および外注 SE が対応の窓口となり適切に対処した。

国文学研究資料館メールシステムを館外からも利用できるように、Web メールを設置を行った。現在、試行中であり、来年度からの一般運用を予定している。

② 共同利用の推進

共同利用等の内容、水準に関する目標を達成するための措置として、資源共有化システムの管理運用を行った。今年度では人間文化研究機構に属する機関のうち、国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、国際日本文化研究センターとのシステム接続を実現し、成功した。総合地球環境研究所については、人間文化研究機構「情報資源の共有化新事業」において実現するための準備を進めている。機構外機関として東京大学史料編纂所、京都大学東南アジア研究所、大阪市立大学情報メディアセンターとのシステム接続を実現している。現在、国立公文書館アジア歴史資料センター、カリフォルニア大学バークレイ校との接続準備を進めている。

複合領域研究系での共同研究プロジェクト「文化情報資源の共有化システムに関する研究」への協力も順調に進み、研究成果の実用化の見通しを得た。さらに、総合研究大学院大学共同研究プロジェクト「文化科学研究分野における情報資源共有化のためのコラボレーション研究」との協力実験にも参画し、情報システムの機能拡充、調整を行った。実証実験を通じて、教育研究環境での資源共有化の見通しを得た。

一方、資源共有化および画像データの利用形態の拡張を実現するため、画像アノテーション機能を利用した一種の電子掲示板システム（BBS）の開発を行い、実用実験を行い、実用化の見通しを得た。

③ 第七期情報システムへの更新準備と基本設計

次期情報システムの更新に向けて、政府調達の手順に則った膨大な作業を順次こなした。また、仕様書作成のための諸準備と具体的な作業を行った。関連する各委員会の準備と開催を行い、とりまとめを行った。また、そのための仕様書、評価書等の作成を行い、準備し、評価をとりまとめた。また、各種調査を行い、資料の招請、意見の招請を行い、必要に応じて各業者とのヒヤリング等を精力的にこなし、とりまとめた。

第六期情報システムは平成 17 年度に更新予定である。そのため第七期情報システムの要求仕様書に基づき、また上記の諸検討と決定に基づき、情報システム基本設計を行った。

これに基づき、次年度次期システムの入札を行い、導入を決定する。

④ データベースサービスの向上

a. 総合窓口の設置とサービス・ログシステムの構築

データベースサービスのための総合窓口の設置とサービス・ログシステムを構築するため、ワーキンググループを発足させ、調査、検討、仕様書の作成を行った。そのに基づき外注により、窓口対応システムの開発を行い、現在テスト中である。新年度から実行する目途が立った。

なお、レファレンスに関する業務も同時に検討し、具体化することができた。

これについても、次年度から実施する体制が整った。

b. ユーザ管理を含むデータ収集・評価支援システムの設計と構築

情報システムの安定的サービス実現の一環として、ユーザ管理システムのログ管理システムおよびデータベースのログ管理システムの開発、および資源共有化システムの Z39.50 ゲートウェイおよびサーバの UTF-8 対応化を行った。システム開発を行い、評価を経て、次年度中に実施する体制を整えた。

c. ホームページのコンテンツ分析及び問題点の指摘

ホームページ委員会との連携のもとで、館内ホームページの改良へ向けての作業を開始した。Web サーバ上へのユーザ領域の確保とアカウントの設定は年度内に終了する。

d. 各データベースの管理運用

ア) データベース全般的な稼働実績

データベースと関連システムの保存と運用管理について、今年度管理対象としたデータベースは以下の通りである。主な管理内容を以下にまとめる。

- 国書基本データベース（著作編）
- 古典籍総合目録データベース
- 図書・雑誌所蔵目録データベース（OPAC）
- マイクロ資料・和古書目録データベース
- 文献調査カードデータベース
- 近代文献情報データベース
- 日本古典文学本文データベース
- 二十一代集データベース
- 奈良絵本画像データベース
- 国文学論文目録データベース（国文学年鑑の刊行）
- 欧州所在日本古書総合目録データベース
- 史料館収蔵史料データベース
- 史料所在情報検索システム
- 史料情報共有化データベース

各システムの運用状況の監視を行った。データ採取は平成 16 年 7 月 14 日から平成 17 年 1 月 29 日の期間、1 日 30 回（1 時間当たり 1～2 回、延べ 62,689 回）無作為にポーリングを行い、各システムの稼働状況をチェックした。結果はバックデータに示す。

なお、ハードウェアの準備が遅れたため、データベースのバックアップ体制の整備が十分に進まなかった。次年度に向け、準備を行っている。さらに、URL の移動などシステム環境の情報収集に努める必要がある。

イ) 個々のデータベース運用管理

上記に掲げた各データベースは、データベース基本台帳を作成し、整理し、管理している。とくに、知的財産権に関わる権利関係を明確に整理した。現在、データベース台帳には、現在公開中、試験公開中、開発中を含む約 60 本のデータベースが準備されている。

一方、人間文化研究機構本部の知財本部からの要求に基づき、データベース台帳の作成に協力し、公開中データベースについてデータを提供した。さらに、機構本部が進める新たな事業「資源共有化」においても、公開中の資源共有化用データベースの情報提供が必要となり、その調査に応じた。下記に、データベース管理運用実績をまとめる。

(2) 文献情報データベース班による運営

文献情報データベース班は、日本文学に関わる典籍、文書等の目録、所在、書誌、本文、画像等の文献情報に関するデータベースを分掌とする。法人化以前の国文学研究資料館情報資源である下記データベースと関連システムの保存と保守、管理運用を行った。研究系及び他の事業部が作成するデータベースと関連システムは、緊密な関係の下に、事業協力を行っている。

① 国書基本データベース（著作編）

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
アクセス件数	4497	6497	6024	6224	5423	8388	8529	7891	7157	7266	6481	6244	80621
検索件数	10715	55435	43491	33203	81099	88816	97886	70947	33149	47793	42471	24146	629151

② 古典籍総合目録データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
アクセス件数	3040	3672	3480	3502	3256	4719	4150	4753	4553	5756	3920	6244	48596
検索件数	2868	4973	3948	5188	5330	6081	5436	8117	5491	7755	4553	24146	66178

③ 図書・雑誌所蔵目録データベース（OPAC）

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
館 外	2628	3584	3731	3860	3796	3988	4145	4842	4779	3095	2587	2101	43136
閲覧室	1921	2767	3071	3587	5225	4321	3631	5037	2560	1908	1582	1569	37179
館 内	2079	1707	5149	4617	2198	3704	2909	3311	2842	2136	2169	1630	34451
合 計	6628	8058	11951	12064	11219	12013	10685	13190	10181	7139	6338	5300	114766

④ マイクロ資料・和古書目録データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
アクセス件数	3425	3815	4226	5241	5038	5137	5016	4484	5823	4398	3355	3712	53670
検索件数	9360	9205	10920	13583	17172	13393	11494	12632	11829	11298	8358	8465	137709

⑤ 文献調査カードデータベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
延べ訪問者数	34	431	506	458	345	352	469	521	508	509	351	301	4785
ページ閲覧数	127	1167	1351	1336	1080	1065	1222	1916	1638	1367	1024	1179	14472

⑥ 近代文献情報データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
延べ訪問者数	79	259	300	257	188	187	249	312	294	282	179	186	2772
ページ閲覧数	204	657	725	674	422	523	605	766	802	767	390	420	6955

⑦ 日本古典文学本文データベース

⑧ 二十一代集データベース

⑨ 奈良絵本画像データベース

(3) 研究情報データベース班による運営

研究情報データベース班は、日本文学に関わる論文目録、研究者ディレクトリ、研究用語、作者・作品・人物等研究情報に関するデータベースを分掌する。法人化以前の国文学研究資料館情報資源である下記データベースと関連システムの保存保守、管理運用を行った。研究系及び他の事業部が作成するデータベースと関連システムは、緊密な関係の下に、事業協力を行った。

日本文学に関する研究情報を網羅した平成 14 年度の国文学年鑑の刊行を行った。また、平成 15 年度の原稿作成、編集作業を行った。

【国文学年鑑】平成 14 年版統計

発行日 平成 16 年 8 月 10 日

発行所 株式会社 至文堂

総頁数 997 頁

販売価格 13,800 円

発行部数 複製部数 800 部

内 訳

雑誌・紀要論文集所載論文件数 12,389 件

特集号一覧件数 267 件

学会一覧件数	45 件
学会研究発表一覧件数	992 件
新指定文化財数	13 件
文部科学省科学研究費補助金等交付数	822 件
受賞一覧数	74 件
計報	30 件
単行本一覧件数	3,214 件
収載雑誌紀要一覧数	1,211 件
発行所一覧数	971 件
翻刻複製作品一覧数	1,147 件
執筆者索引数	9,794 件

① 国文学論文目録データベース（年鑑の編集まで）

	16 年
アクセス件数	115,966

② 欧州所在日本古書総合目録データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
アクセス件数	222	282	252	208	171	205	253	197	238	232	244	210	2714
検索性件数	117	216	155	125	40	78	130	241	89	99	75	65	1430

(4) 史料データベース班による運営

史料データベース班は、記録史料の所在・分類・性質等、史料情報に関するデータベースの作成支援、管理運用等を行う。法人化以前の国文学研究資料館情報資源である下記データベースと関連システムの保存と保守、管理運用を行った。研究系及び他の事業部が作成するデータベースと関連システムは、緊密な関係の下に、事業協力を行っている。

① 史料館収蔵史料データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
訪問者場所数	516	656	640	594	517	598	574	620	572	601	556	524	6968
検索要求回数	3008	4346	6050	3879	3868	3516	3227	4164	3682	4082	3485	3374	46681

② 史料所在情報検索システム

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
訪問者場所数	106	143	160	152	145	151	151	141	130	149	130	111	1785
検索要求回数	565	764	882	968	698	1019	935	1343	1321	711	1266	625	11909

③ 史料情報共有化データベース

平成 16 年度アクセス件数

	16 年									17 年			合 計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
訪問者場所数	170	235	219	192	180	200	222	203	201	215	161	152	2350

(5) 新規データベースの準備

研究系、事業部において、今年度公開に向けて準備中であった下記 4 本のデータベースについて、次年度からの公開のための準備を行った。データベース台帳への登録、とくに知的財産権の処理を行っている。

- ① 勅撰二十一代集データベース（実験公開から一般公開へ転換）
- ② 吾妻鏡データベース
- ③ 源氏物語（絵入）データベース
- ④ 人物画像データベース
- ⑤ 実業史（日本実業史博物館設立準備室旧蔵）絵画データベース

3. 普及・連携活動事業部

【総 括】

普及・連携活動事業部は、講演、展示、シンポジウム、セミナー等の各種イベントを通じて、館が築いてきた学問的成果を公開して広く社会にアクセスし、社会貢献を具体的に実現することを任務とする。その際、国際的連携を多様に行う館の取り組みも盛り込み、その社会貢献はそのまま国際社会への貢献の姿をも持つ。

平成16年度に実施した普及・連携活動事業部の事業は、以下に示すとおり個々の目的を十分に達成することができた。さらに今後、年度の進行によって期待されるもろもろの研究成果を確実に受け止め、総体として館の価値の発信を充実させ、整備していく予定である。

【連続講演】

(1) 概 要

本年度は、以前から希望の多かった『平家物語』をテーマに取り上げた。早稲田大学文学部教授日下力氏を講師にお願いして、「『平家物語』転読」というタイトルで、全5回の連続講演を行った。例年と同じように、申し込み制とし、往復葉書で申し込みをしてもらったが、予定していた定員120名を大幅に超えたため、定員を増やし、抽選を行った。今回の連続講演に併せて、通常展示「平家物語とその周辺」を開催した。なお、今年度の連続講演も、笠間書院の『古典ルネッサンス』というシリーズの第3巻として、単行本化されることが決定している。

(2) 活動記録

テーマ：『平家物語』転読

第1回	9月30日	乱世を生み出す心—鹿の谷事件—	182人
第2回	10月21日	人間の描出—以仁王事件—	152人
第3回	11月25日	人それぞれの生—都落ちのドラマ—	149人
第4回	12月16日	戦いの現実—一の谷合戦の酷—	141人
第5回	1月20日	終局と残映—語りつがれたもの—	144人

【シンポジウム】

(1) 概 要

秋の特別展示と連携した形で、シンポジウムは「古筆切研究の現在」と題した。これは最新の研究動向を広く一般の古典文学愛好者に披露し、その理解関心を深めることを目的としている。古筆切は、以前から美術品として珍重されてきたが、文学研究にも大きな価値を有することが認識されたのは近年に属する。それだけに、本文研究への活用、所在情報の整理などは、個々の研究者が独自に進めており、古筆切そのものを主体とした研究を確立し、その方向性を見出したい、ということが開催の目的であった。

3名のパネラーの発表については、アンケートの内容からも判断されるように、学術的に高度であり、一般への啓蒙的な意味も持っていた。

当日は学術的な内容の催しとしては異例な多数の入場者数があったが、単に参加者数ばかりではなく、普段はほとんど交流のない書道関係者の来聴・発言が多かったことが実績の一つである。これは広報をその方面に広げた効果と言える。

当日の討議の結論として「古筆切資料の書誌情報の規格統一化、そうしたデータの集成と公開・利用」という課題が提起され、また、今後、当館が最も力を入れて取り組むべき研究テーマとなりうることを確認した。アンケートには同様の古筆切関係のシンポジウム開催を望む声が多数あり、開催者側の企図は十二分に酬われたと考えられる。なお、その内容は、特別展示図録『古筆への誘い』に収めて刊行した。

(2) 活動記録

テ ー マ：「古筆切研究の現在」

日 時：平成 16 年 11 月 19 日（金）13 時 30 分～17 時 00 分

場 所：当館 1 階大会議室

パネリスト：久保木秀夫、佐々木孝浩（慶応義塾大学助教授）、別府節子（出光美術館学芸員）

コーディネーター：兼築信行（早稲田大学教授）

参 加 者：153 人

【大学生・大学院生のための専門セミナー】

(1) 概 要

今年度は、文学資源研究系の研究プロジェクト「和刻本漢籍の研究—五山版・近世初期刊本—」の構成員が、研究・教育面を担当し、当該研究において運用・蓄積される書誌学的な諸知識に関する講義・文献資料調査に際しての実技指導を行った。対象は、学部 3・4 年生から大学院修士課程に在籍の者とし、原資料に基づいた、具体的かつ実践的な指導を行って、当該分野の振興を促すことを目的とした。

原資料を教材として使用するため、受講者の人数を絞って実施する必要があったが、申込者数が多数になったので、受講者を大幅に増やして対応した。

ここに、創立以来、国文学及び周辺資料の調査・収集活動を続けてきた当館の、研究・教育上における有効性が認められた。また、補講（当該分野に関する初歩的内容の講義）の設置に関する評価も高く、研究者ばかりでなく、研究を志す学生・大学院生を対象とした基礎的かつ実践的なセミナーの開催の必要性が認められた。

(2) 活動記録

名 称：大学生・大学院生のための専門セミナー「版本調査の基礎—五山版・近世初期刊本—」

開催日：平成 16 年 9 月 27 日、10 月 4 日、10 月 18 日、10 月 25 日（全 4 回）

受講者：43 名

【高校生セミナー】

(1) 概 要

日本文学への関心を高め、日本文化への理解を深めてもらうために高校生を対象としたセミナーを 2 月 5 日（土）の午後、高知県立人権啓発センターにおいて開催した。今回は高知県高等学校教育研究会国語部会との共催、及び高知県教育委員会の後援を得、高知県内の主要な高等学校への積極的な呼びかけを行った。

このセミナーは、当館若手教員によって単なる受験知識ではない日本文学についてのおもしろさを分かりやすく伝え、日本文学へ親しみを感じてもらうことを目的とし開催しているが、昨年度は当館で開催したものを今回は地方開催とし、地元教育界との連携の強化に努めた。

(2) 活動記録

開催日：平成 17 年 2 月 5 日（土）

場 所：高知県立人権啓発センター

参加者：84 人

【通常展示、特別展示】

(1) 概 要

専門の研究者・学生、及び一般の文学愛好者を対象として、当館が収集した古典籍や他機関所蔵の貴重な古典籍を、テーマに沿って随時公開し、研究・教育の向上と、一般への文学の普及を図ることを目的として、以下の展示を開催した。いずれの展示においても、アンケートでは好評を得、所期の目標を十分に達成した。

なお、通常展示としては「和書のさまざま―書誌学入門―」を年 2 回、特別展示としては特別展示《新収資料展》、「平家物語とその周辺」、秋季特別展「古筆と和歌」を行った。

① 通常展示「和書のさまざま―書誌学入門―」

この展示は、本の装訂・書型・料紙などを当館所蔵の古典籍を用いて解説したもので、書誌学の基礎知識を分かりやすく知悉せしめ、研究・教育に裨益することを目的とする。また、この展示は、別記日本古典籍講習会に併せる形でも開催した。

今後は、引き続いて解説内容と資料を更新し、これを、インターネットもしくは DVD などの形で、画像を伴う書誌学の教材として世に供する計画を進めている。

② 特別展示「新収資料展」

この展示は、上記「和書のさまざま―書誌学入門―」の併設展で、近年に当館所蔵となった古典籍を広く公開することを目的とする。また、この展示は、中古文学会春季大会（5 月 22 日（土）～ 23 日（日）、東京大学）に併せる形で開催し、研究的意義のある貴重な資料を学会に紹介することをも目的とした（鎌倉期書写『源氏物語』や契沖自筆『萬葉代匠記』など）。今後も、研究・教育に供するよう、新収資料の公開を進めていく予定である。

③ 特別展示「平家物語とその周辺」

この展示は、別記連続講演「『平家物語』転読」に併せる形で開催したもので、講演会参加者を含めた一般の文学愛好者に対し、当館所蔵の古典籍を用いて、軍記物語の歴史を分かりやすく解説することを目的とする。

今後も、連続講演に併せる形で、貴重書を含む特別展などの形にして継続する予定である。

④ 秋季特別展「古筆と和歌」

この展示は、これまで未公開であった個人蔵の古筆切や、新出の古筆切、個人蔵の人麿資料などを、当館のネットワークを利用して一堂に集め、今後の文学研究に供することを目的として開催したものである。また、これに併せて、別記シンポジウム「古筆切研究の現在」を開催し、展示作品の意義と古筆切研究の新たな方向を世に広める催しも行った。展示及びシンポジウムの開催に当たっては、和歌文学会の後援を得た。計 67 点に及ぶ古筆切の公開は、研究者以外の間でも反響を得、書道関係の雑誌『墨』、茶道関係の雑誌『なごみ』で取り上げられた。なお、展示に供した古典籍の図版と解題は、上記シンポジウムの要旨とともに、『古筆への誘い』として三弥井書店より刊行した。

(2) 活動記録

① 通常展示

平成 16 年 4 月 1 日（木）～ 5 月 27 日（木） 37 日間 585 名

平成 17 年 1 月 25 日（火）～ 3 月 24 日（木） 41 日間 672 名

② 特別展示「新収資料展」

平成 16 年 5 月 17 日（月）～ 5 月 27 日（木） 9 日間 270 名

③ 特別展示「平家物語とその周辺」

平成 16 年 9 月 30 日（木）～ 10 月 28 日（木） 20 日間 526 名

④ 秋季特別展「古筆と和歌」

平成 16 年 11 月 10 日（水）～ 25 日（木） 11 日間 770 名

【研修等】

(1) アーカイブズカレッジ

① 概 要

長期コースは、前期 7 月 5 日（月）～ 7 月 30 日（金）、後期 8 月 30 日（月）～ 9 月 24 日（金）の日程で国文学研究資料館において開催した。国内には類似の研修会がなく本カレッジへの参加希望が強いため、申込者 47 名全員を受け入れることにした。次に短期コースは 11 月 8 日（月）～ 11 月 13 日（土）に愛媛県立図書館（松山市）で開催した。今年度長期コース履修生に対するアンケート調査を行い、調査結果を来年度以降の運営改善に生かしたいと考えている。

なお、カリキュラム等の改善を図るための研究会は、アーカイブズ研究系教員を中心に 5 回開催した。

② 活動記録

a. 長期コース

開催日：平成 16 年 7 月 5 日（月）～ 7 月 30 日（金）

平成 16 年 8 月 30 日（月）～ 9 月 24 日（金）

場 所：国文学研究資料館

b. 短期コース

開催日：平成 16 年 11 月 8 日（月）～ 19 日（金） 31 名

場 所：愛媛県立図書館

(2) 日本古典籍講習会

① 概 要

日本の古典籍を所蔵する機関の図書館員等を対象に、3 日間にわたり全 14 コマからなる講習を実施した。日本各地及び世界各国には、古典籍を所蔵しながらもその整理・保存・目録化が正しい形で進められていない機関が多くある。この講習会は、古典籍を整理・保存・目録化するための基礎知識を講義し、各機関が所蔵目録を共有化できるための情報を提供することを目的とする。募集に際し、大学図書館・公立図書館・私設文庫などから多数応募があり、当館所蔵の古典籍を用いた実習を行うため、定員を絞った。本講習会では、当館図書館員・当館教員が図書館学・書誌学などについての基礎講義・発展講義を行うとともに、国立国会図書館の協力を得て、古典籍の電子化についての講義も行う。本講習会によって、古典籍取り扱いの基礎知識を知悉せしめ、知識と情報の共有化を図るためのネットワークを築くことができよう。

② 活動記録

開催日：平成 17 年 1 月 25 日（火）・26 日（水）・27 日（木） 34 名

【国際研究集会・国際シンポジウム】

(1) 国際日本文学研究集会

① 概 要

第28回国際日本文学研究集会を実施するため、国際日本文学研究集会委員会を2回開催し、実施計画の策定、招待研究発表者の決定、応募研究発表者の採択などを行った。「教養としての古典—過去・現在・未来—」をテーマとし、第28回国際日本文学研究集会を2日間にわたって開催した。研究発表10件、講演1件が行われ、活発な討議が行われた。日本学術振興会の助成を獲得し、研究発表のうち4件は海外からの招待研究発表とすることができた。発表後持たれた討議では、現代における古典教養の危機がグローバルな視点から指摘され有益であった。日本語・英語による発表レジメを、今年初めて参加者に事前送付したことは、外国人参加者の理解を助け、好評であった。参加者数は昨年を上回った。ただ、家族の危篤などの理由で発表辞退者が2名出るという例年にない事態が発生し、補欠による対応などに今後の課題を残した。また、招待研究発表の数が多くなったため若手研究発表者の採択数を減じざるを得なかった点も問題であった。年度末に『第28回国際日本文学研究集会会議録』(250頁)を刊行した。

② 活動記録

開 催 日：平成16年11月11日～12日 115名

場 所：当館1階大会議室

講 演：「江戸時代前期文芸における古典教養—俳諧・浄瑠璃などに見る謡曲の引用—」
ボナベンチャー・ルベルティ

研究発表：「忘れられた一文芸の系譜—加藤清正伝承から見た「壬辰倭乱物」—」

金 時 徳

「国学者平田篤胤の著書とその広がり」

吉田麻子

「源氏物語の漢訳受容をめぐって—明治時代を中心に—」

岡部明日香

「森鷗外と明清小説『情史類略』—『舞姫』『うたかたの記』『雁』を中心に—」

林 淑 丹

「現代人の感覚を呼び戻す古典の中の謡曲の役割—卒塔婆小町の一句の一例—」

Zdenka Švarcová

「武者小路実篤における戦争認識の本質—『ある青年の夢』と『大東亜戦争私感』を中心に—」

楊 琇 媚

「言文一致体」を越えて—谷崎潤一郎における古典を翻訳する意味—」

李 漢 正

「近松の霊と21世紀の恋人たち—連歌・連詩における古典の役割—」

Eduard Klopfenstein

「西鶴と『徒然草』の関わりについて」

Daniel Struve

「王朝文学における求愛ストラテジーの考察」

Margaret Childs

4. 情報資料サービス事業部

【総 括】

情報事業センターの設置により、資料・情報の収集整理、保存、提供を適切に行う体制を整備した。日本文学部門と歴史資料部門に分かれていた図書館組織が統合され、事業の効率化が図られた。特に、図書資料の選定を集中したこと、受入・利用サービス関係事務を一本化したことは、改善された点と言える。しかし、現状では施設面の制約があるため、実質的な統合は、平成 20 年度に予定されている立川移転後を待たなくてはならない。また、資料の保存・修復措置、マイクロ資料目録・和古書目録・古典籍総合目録の作成などの独自の業務を継続的に実施した。利用者サービス面では、所蔵資料の画像配信が、次年度以降の課題となっている。

【図書資料の収集】

(1) 概 要

各部門に分散していた資料購入費を一括して運用することができ、適切かつ効果的な資料購入計画を立てることができた。また、後藤重郎旧蔵書など、貴重な資料の収集が実現した。

① 活動記録

図書資料の体系的な収集に努めた。
古典籍原本は新古今和歌集関係コレクション 61 点ほかを購入した。

1 - 1 図書資料受入統計

資料種別		日本文学関係				歴史関係			
		点数等		冊数等		点数等		冊数等	
		平成16年度	累 積	平成16年度	累 積	平成16年度	累 積	平成16年度	累 積
収 集 マ イ ク ロ 資 料	マイクロフィルム	3,846点	172,241点	879リール	39,123リール	13件	172件	573リール	5,108リール
	マイクロフィッシュ	0	16,649点	0	57,321枚	-	-	-	-
	紙焼写真本	-	-	5,608枚	66,042冊	-	-	54冊	10,563冊
図 書	写本・版本	549点	8,609点	859冊	30,946冊	-	-	-	-
	活字本・影印本等	-	-	2,349冊	81,982冊	-	-	2,117冊	56,230冊
	逐次刊行物	2,043誌	5,115誌	4,385冊	156,853冊	-	-	1,751冊	56,926冊
所蔵史料		-	-	-	-	1件	402件	*	約500,000点
寄託資料・寄託史料		0	3件958点	0	4,307冊	0	19件	0	8,890点

* 「外務省調査局関係資料」他 24 点が寄贈された。

【図書資料の受入・整理】

(1) 概 要

資料管理の面では、法人化を機に図書受入システムの利用を開始し、支払・資産台帳用に利用することで一元管理、効率化を目指した。また、マイクロ資料目録、和古書目録、古典籍総合目録に共通する目録規則として、「日本古典籍書誌レコード作成要領」を作成し、マニュアルの改訂を行った。

(2) 活動記録

① 貴重書・特別コレクションの指定

新たに貴重書5点、特別コレクション3件を指定した。

1-2 平成16年度指定貴重書・特別コレクション

項目	請求記号・文庫番号	書名・コレクション名	備 考
貴重書	99:107	天徳四年内裏歌合	室町後期写 1冊 三条西家旧蔵本
	99:108	菅原道真集断簡	伝藤原為家筆 1葉 鎌倉時代後期頃写
	99:109	和漢朗詠集 下	下巻「山」部以降巻末まで 写1軸 古訓点・書入本
	99:110	古今集序中六義諸説並自註	小沢蘆庵自筆 1冊
	99:111	〔室町中期連歌学書〕	室町中期頃写 1冊
特別コレクション	90	岩津資雄旧蔵書	故岩津資雄の歌学書を中心とした旧蔵書 和古書 155点432冊・和装本82点152冊・活字本32点46冊
	91	渡辺家旧蔵書	幕末期の儒者渡辺魯輔旧蔵資料ほか渡辺家伝来の稿本、書翰、文書、書画軸類 332点415冊
	92	懷風弄月文庫	『新古今和歌集』関係コレクション 61点127冊

② 図書資料の整理・目録作成

a. マイクロ資料目録作成

- ・書誌データ作成 約5,024件
- ・書誌データ登録 約7,200件
- ・データベース移植時の未コントロール分処理

b. 和古書・明治期資料の整理

- ・和古書の整理 798点
- ・明治期資料の整理 1,025冊
- ・和古書目録書誌データ作成（登録） 1,542件
- ・明治期資料の遡及入力 898冊

c. 活字本・影印本の整理

- ・活字本・影印本の目録作成 1,599冊
- ・活字本・影印本の遡及入力 7,706冊
- ・地方史誌（史料目録）の整備と点検 11,447件

d. 史料の目録データ整備

- ・仮目録状態の史料群のうち、日本実業史博物館準備室旧蔵資料
 広告の部…571点、写真の部…2,488点の目録を整備し閲覧条件を向上させた。
 次年度は、未公開であったアーカイブズの部の目録を公開予定。

【資料の保存】

(1) 概 要

原形を尊重した保存・修復措置を継続的に行ったほか、劣化が顕著な歴史資料のマイクロフィルム代替化を行った。

(2) 活動記録

① 保存措置・修復処置

『所蔵史料目録』刊行後の史料について以下の保存措置・修復処置を実施した。

- 本格的保存措置（閲覧用識別ラベル貼付、中性紙封筒・帙等への収納と状態調査記録作成、部分的修復処置）…… 4,517点
- 簡易的保存措置（保存容器への収納）…… 1,118点
- 部分的修復処置（部分裏打ちと紙継剥離貼り合わせ）…… 126点
 - ・「尾張国名古屋元材木町犬山神戸家文書-2」「信濃国高井郡東江部村山田庄左衛門家文書-1」
 - ・「依田家文書」「新潟県諸村役場文書」
 - ・17の史料群の内

② マイクロフィルムへの代替化

公開されている『武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書』は、利用頻度が高いため史料の劣化が顕著となっている。この史料は、すでに財団法人多摩市文化振興財団で複製化が済んでいるため、マイクロフィルムを借用して164リールの複製を行った。

- ・「武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書」
- ・「武蔵国多摩郡連光寺村富沢分家文書」
- ・「武蔵国多摩郡和田村石坂家文書」
- ・「武蔵国多摩郡寺方村佐伯家文書」

【利用者サービス】

(1) 概 要

図書館関係規則を見直し、「図書館利用規則」の利用資格を撤廃、資料を必要としている人は誰でも利用できるようにした。また、閲覧室の全冊開架雑誌を大幅に増やし、利用の便と資料出納の効率化を図った。

資料・情報の公開の面では、昨年度に引き続き Web 上で公開している目録データベースの更新に努めた他、明治期資料の図書雑誌所蔵目録（OPAC）への遡及入力を進めた。

また、海外機関および遠隔地の利用者から、所蔵資料の画像による提供の要望が寄せられており、次年度以降の課題となっている。

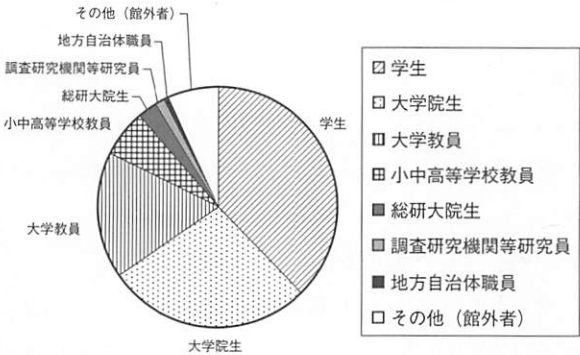
(2) 活動記録

① 資料の閲覧及び複写

・ 閲覧利用者

項 目	人 数	備 考
開 室 日 数	224 日	
登 録 者	1,725 人	
入 室 者	7,323 人	うち 923 人は歴史閲覧室

来館利用者の構成



・ 貸出出納点数

項 目	数 量	備 考
図 書	7,935 点	うち 604 点は歴史閲覧室
逐次刊行物	6,125 点	うち 118 点は歴史閲覧室
ポジフィルム	3,827 点	
紙焼写真本	2,763 点	
史 料	17,304 点	歴史閲覧室のみ
紙焼写真本一夜貸	278 点	

4 - 3 文献複写

項 目	数 量		料 金
電子複写	22,565 件	156,588 枚	5,457,165 円
RP による電子複写	2,950 件	114,447 枚	4,316,385 円
フィルム複製	14 件	6,849 コマ	93,875 円
紙焼作製	119 件	5,879 枚	702,330 円

② 相互協力サービス

・ 相互協力件数

項 目		受 付		依 頼
貸 借		16 件、35 点、36 冊		8 件
複 写	電子複写	3,646 件	26,782 枚	16 件
	RP による電子複写	628 件	31,744 枚	12 件
	フィルム複製	843 件	63,987 コマ	6 件
	紙焼作製	151 件	32,392 枚	58 件

- ③ レファレンス・サービス
 - ・文書による質問 38 件
 - ・電話等による質問 約 700 件
 - (内訳)所蔵調査 約 300 件
 - 利用についての問い合わせ 約 200 件
 - クイック・レファレンス 約 200 件
- ④ 掲載許可申請受付
 - ・翻刻掲載 15 件
 - ・写真掲載 88 件
- ⑤ 資料の展示貸付

4-5 展示貸付一覧

貸出機関	展示内容	展示時期	貸出資(史)料	点数
物流博物館	木と竹と藁の荷造り	平成 16 年 6 月	紀伊国名所図絵	1 点
全日本かるた協会	小倉百人一首の世界	平成 16 年 6 月	姿絵百人一首ほか	3 点
朝日町歴史博物館	江戸期子ども絵本の世界	平成 16 年10月	小敦盛ほか	3 点
渋沢史料館	日米実業史競	平成 16 年 9 月	机ほか	31 点
神奈川県立金沢文庫	滑稽徒然草—近世の読書事情	平成 16 年 21 月、 平成 17 年 1 月	徒然草ほか	17 点
富士市立博物館	描かれた富士のふもと	平成 17 年 3 ～ 4 月	天和二年戊八月朝鮮人来朝 ニ付駿州富士川舟橋之会図	2 点

- ⑥ 目録の公開

活字本・影印本についての遡及入力作業がほぼ終了し、「図書・雑誌所蔵目録 (OPAC)」でこれら全資料が検索可能となった。 (「図書・雑誌所蔵目録 (OPAC)」 「マイクロ資料・和古書目録」の利用件数は 2. 電子情報事業部で報告)

【古典籍総合目録事業】

- (1) 活動記録

データ作成部分について以下のように実施した。(公開については 2. 電子情報事業部で報告)

 - ① データソース収集、所蔵者との連絡 (書誌情報の古典籍総合目録データベース収載公開についての依頼等)
 - ② 書誌データ作成 (登録) 12,555 件
 - ③ 基礎データ (典拠データ) 追加・改訂
 - ④ 『国書総目録』所在・翻刻複製情報の校正・修正
 - ⑤ データ作成マニュアル改訂